

公開シンポジウム

# 海外調査地 開拓のすすめ



〈主催〉

科学研究費補助金基盤研究(S)

「社会性の起原と進化：人類学と霊長類学の協働に基づく人類進化理論の新開拓」

〈共催〉

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

基幹研究(人類学)「社会性の人類学的探究：トランスカルチャー状況と寛容／不寛容の機序」



# 社会性の起原と進化 公開シンポジウム

## 「海外調査地開拓のすすめ」

日 時：2023年7月22日（土）13:00～17:00

場 所：ハイブリッド開催（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所3階  
303室およびZoom）

主 催：科学研究費補助金基盤研究（S）「社会性の起原と進化：人類学と霊長類  
学の協働に基づく人類進化理論の新開拓」

共 催：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所  
基幹研究（人類学）「社会性の人類学的探究：トランスカルチャー状況と  
寛容／不寛容の機序」



# 社会性の起原と進化 公開シンポジウム

## 「海外調査地開拓のすすめ」

I 挨拶	河合 香吏 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)	1
II 趣旨説明	中川 尚史 (京都大学大学院理学研究科)	3
III 発表		
「ガーナ・モレ国立公園におけるパタスモンキーの調査地開拓」		11
	半沢 真帆 (京都大学大学院理学研究科)	
「トルコ共和国におけるアレヴィーの調査地開拓」		25
	今城 尚彦 (東京外国語大学大学院総合国際学研究科)	
質疑応答		34
「マレーシア・キナバタンガン地域におけるテングザルの調査地開拓」		41
	松田 一希 (京都大学野生動物研究センター)	
「東アフリカ牧畜民の調査地開拓：ケニアのチャムスとウガンダのドドス」		52
	河合 香吏 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)	
質疑応答		64
IV コメント		
コメント1：ガボン・ムカラバにおける大型類人猿の長期継続調査		69
	竹ノ下 祐二 (中部学院大学看護リハビリテーション学部)	
コメント2：ボツワナ・ハンシー地区におけるグイ／ガナの長期継続調査		77
	高田 明 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)	
質疑応答		82
V 総合討論		87



## I 挨拶

(中川) まずは、この研究会は河合香吏さんの科研費で運営されていますので、いわばその主催者の河合さんの方からご挨拶を頂きたいと思います。

河合 香吏

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

こんにちは。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）の河合です。本日はご参集ありがとうございます。今、この会場に38名、オンラインで、これは登録者数ですけれども75名ほどがご参加くださることになっています。どうぞよろしくお願いいたします。

本日のシンポジウムは、AA研の所内組織である基幹研究人類学「社会性の人類学的探究：トランスカルチャー状況と寛容／不寛容の機序」と、私が代表をしております科研費プロジェクト「社会性の起源と進化：人類学と霊長類学の協働に基づく人類進化理論の新開拓」の共催での開催となりました。本シンポジウムの企画は、この科研の研究分担者である京都大学の中川尚史さんにお任せしております。

少しこの科研のお話をしたいのですが、この科研プロジェクトは2019年度に始まって、今年度が5年計画の5年目、つまり最終年度です。ただ、2019年度に始まったといいますが、採択が決まったのが6月末で、活動を開始したのが10月でしたから、実質4年半の活動期間となっています。その上、開始した3カ月後にはコロナ禍に見舞われまして、その後丸3年間、本科研の大きな柱であるフィールド調査も、対面での研究集會も全くなりませんでした。その間はオンラインやハイブリッドで研究会を重ねる他ありませんでした。ですからこうして、ハイブリッドではありますけれども対面でも研究集會が開催できるようになったことは、とてもうれしくありがたく思っています。

この後すぐに企画担当の中川さんから趣旨説明があるかと思いますが、中川さんはコロナ禍が少し収



## I 挨拶

まりかけていた2021年度に、いち早くガーナの新しいフィールドでパタスモンキーの調査を開始されました。今日のシンポジウムのトップバッターである半沢真帆さんは、その共同研究者です。その経緯の紹介を兼ねて、恐らく今日のシンポジウム「海外調査地開拓のすすめ」を中川さんは企画されたのだと思います。

この科研は、先ほども申し上げましたタイトルにもありますように、人類学と霊長類学の協働を基本としています。本シンポジウムの登壇者もそれに沿って、パネリストもコメンテーターも人類学者と霊長類学者が同数となっています。人類学も霊長類学も、ともにフィールド調査を研究の基盤とするフィールド科学です。実験系とも理論系とも文献学とも違うフィールドサイエンスであるという共通点があります。

それでも、調査方法の具体的なあり方などには共通点もあれば全く異なる点もあります。フィールド開拓の方法も同様に、共通点と異なる点があると思います。そのこと自体を問題にしてゆくことも、人類学と霊長類学の協働を謳うこの科研プロジェクトの目的の一つかと思っています。どんな議論になるのか楽しみにしています。午後5時までの長丁場となりますが、どうぞお付き合いくださいますよう、よろしく願いいたします。以上でご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

**(中川)** 河合さん、ありがとうございます。引き続きまして私の方から趣旨説明をさせていただきます。少しお時間を頂きますが、お付き合いください。

(以下スライド併用)

---



## II 趣旨説明

中川 尚史

京都大学大学院理学研究科

# 3

趣旨説明に入りますけれども、私自身は霊長類のフィールドワークをしておりますが、霊長類学、そして生態人類学は、いずれも京都大学発祥の学問です。共通点がございまして、いずれも少数のパイオニアがいらっちゃって、それが調査地の開拓をし、チームとして長期継続調査をするということで、長期データでしか成し得ないような数々の成果を挙げてまいりました。

ですが、人が1人しかいないわけですから、そうしますと、どうしても比較研究、同一の研究者が比較するというようなことはなかなか難しくなってきました。ですから、ここで同一研究者にこだわったのは、私自身の考え方ですけれども、やはり同一研究者であるということは、ある意味比較軸がクリアになるので、先行研究を比較するというものよりはずっと精度の高い比較ができるということなのですが、そういった研究ももう一方で必要だろうと思っています。他方、文化人類学の方は、河合さんらに伺ったところによりますと、割と個々の研究者が新たに調査地を開拓していくという状態だとお伺いしました。

もう一方で、この後お話ししますが、霊長類の研究に割と特化した話として、最近若い人たちが海外にあまり行きたがらないという側面もありつつ、行きたがったとしても既存の長期継続調査地に入っていく。それはそれでももちろん選択肢として重要なことではあるのですが、みんなそれではどうかということで、やはり新しい調査地にもチャレンジして行ってほしいというのが今回の大きな目的です。

そういう目的ですので、まずは調査地開拓の困難さ、あるいはもう一方で醍醐味というものを主に発表者に発表していただいて、もう一方でコメンテーターとして長期継続調査をされているチームリー



## II 趣旨説明

ダーの方に、長期継続調査ならではの醍醐味あるいは困難を併せて発表していただきます。それで全体として若い人たちが、「やはり私も海外に行って、調査地を開拓していきたいな」という雰囲気づくりになれば、この会は成功かなと思っています。

最後に、先ほど河合さんの方からもありましたけれども、このプロジェクトとしては人類学と霊長類学のコラボというところがありますので、先ほど紹介したように、なぜ生態人類学と霊長類学はチームでの長期継続調査が一般的で、文化人類学者はそうではなく、個々で開拓していくのが常態なのかというところを議論していければいいなと思っています。

### # 4

これが趣旨なのですが、その背景としましては、私自身の能力の問題もあって霊長類学に特化した話になってしまいますけれども、まず日本の霊長類学は1948年に始まったといわれています。その創始者が、写真の真ん中にいらっしゃる今西錦司先生です。

どういう形で始まったかといいますと、比較社会学です。今西先生は都井岬の半野生馬、そして隣に座っておられるのが、右側が伊谷純一郎先生、左側が川村俊蔵先生なのですが、それぞれにニホンザル、あるいはシカの調査をされて、動物種間の社会を比較するというところから実は霊長類学は始まりました。

そのときに用いた調査方法としては、まずは社会ですので、やはり個体識別、個体に名前を付けて区別していく。そのためには至近距離から観察する必要性があって、まずは餌を使って慣らすというようなことです。そして最終的には長期で継続調査をするという、この3点セットで調査が始まりました。

その後、餌付けはやはりそれぞれの動物の社会をゆがめてしまうところがあるでしょうということ、餌を使わずに人そのものに慣らすという「人付け」と呼ばれる方法に移行して、これがいわゆる世界標準になっていったという経緯があります。

やがて、その中でもサル、まずはニホンザルにフォーカスが当てられていきます。当時は戦後間もない時代ですのでお金もなく、そのときにでも、野外フィールド調査は、双眼鏡は少し高いですが、フィールドノートと鉛筆ぐらいあれば、あとは旅費がかかりますからわずかなお金と、大事なものはファイトだというふうにおっしゃっていて、このぐらいのことがあればフィールドワークはできるとい

---

うことでスタートしました。

#### # 5

1950年代後半になりますと、ニホンザルから海外に出ていく人たちが出てきます。まずはタイの方でテナガザルの調査を梅棹忠夫先生、川村先生らが始められました。アフリカの方に目を向けますと、今西さん、そして学生の伊谷さんが日本モンキーセンター隊としてウガンダのマウンテンゴリラの調査を始められ、そして翌年には、少しメンバーが代わりまして河合雅雄先生、水原洋城先生が調査をされました。

#### # 6

1960年代になりますと、アジアの方ではインドで宮地伝三郎先生、川村先生、杉山幸丸先生らが調査を始められて、ここで有名なダルワールのハヌマンラングールの子殺しが発見されたという経緯があります。

アフリカの方は、コンゴ動乱でマウンテンゴリラの調査地に入れなくなって、タンザニアのチンパンジーの方に移っていきます。ここで科研費隊として今西さん、伊谷さんらがタンガニーカ湖畔のカボゴという所に基地を構えます。写真にありますとおり、テントがたくさん張られているのが見えるかと思いますが、ここに座られているのが今西さんです。割と大規模な調査基地（ベースキャンプ）を構えて調査を始められました。

その後、隊長が伊谷さんに移ってからは、カサカティという少し北の所にベースキャンプが移りました。このベースキャンプを中心にフィラバングという所やカソゲという所に、それぞれここに書いたメンバーが調査に単独で入ることになっていきます。カソゲの方で実は、西田利貞先生になってからチンパンジーの餌付けに成功して、チンパンジーの長期継続調査が開始されたというわけです。

一方で、フィラバングの方でやられていた加納隆至先生が、旧ザイルのワンバという所でボノボの餌付けに成功されたのが1976年です。そちらの方でも長期継続調査が始まりました。

もう一方で、西田さんの前にカソゲに行かれていた伊沢紘生先生は、今度は新世界ザルについてコロンビアのマカレナで長期継続調査を始められるという経緯がございます。

東アフリカのチンパンジーの方に目を向けますと、杉山先生、鈴木晃先生らがブドンゴという所で調

---

## II 趣旨説明

査を始められています（以上、西田 1999）<sup>1</sup>。

他方、生態人類学の方に目を向けますと、田中二郎先生がボツアナ・カラハリのサン・ブッシュマンの調査を 1966 年だと思いますが、始められたということがございます。

### # 7

これは、マハレというチンパンジーのフィールドで餌付けを完了して、その後 2015 年にちょうど 50 周年を迎えたときのイベントの記事です。それからさらに 8 年ぐらいたっていますが、こういうところが世界に誇る日本の長期継続調査地の一つのマハレという所です。

### # 8

さて最近、日本霊長類学会で百科事典<sup>2</sup>を作ったのですが、その中で、アフリカ、マダガスカル、アジア、そして中南米の野外研究の歴史という項目がそれぞれ執筆されました。その中に書かれたことなどをいろいろ調べて、これまで日本人が野生霊長類の継続調査地をどういう形で、どういうタイミングで開拓してきたかという累積数がこれです（図 1）。破線がアジアですが、アジアは先ほど出ましたように、インドのダルワールを皮切りに、ただししばらくアジアの方は開拓がなくて、その後インドネシアのカレンタやクタイ、グヌン・メル、クリンチ山などがずっとあって、キナバタンガンが今日お話しただく松田さんのフィールドになっています。そしてダナムバレー、カオタモーといった所で調査地が開拓されています。

ご覧になって分かる通り、最初は増えなかったのですが、アジアの方は比較的コンスタントに新しい調査地が開拓されているということが分かります。他方、アフリカ類人猿隊の方は点線で示されていますが、先ほど出ましたマハレやブドンゴをはじめとして、ワンバのボノボ、そしてボツウ、西の方のチンパンジーや、カフジ、ンドキ、この辺りからはゴリラの調査地になっていきますが、そしてカリンズ。ムカラバが、今日コメンテーターでお話しいただく竹ノ下さんを隊長とするチームです。それか

<sup>1</sup> 西田利貞「霊長類学の歴史と展望」『霊長類学を学ぶ人のために』（西田利貞・上原重男編），世界思想社，pp. 2-24.

<sup>2</sup> 日本霊長類学会（編）『霊長類学の百科事典』丸善出版，2023.

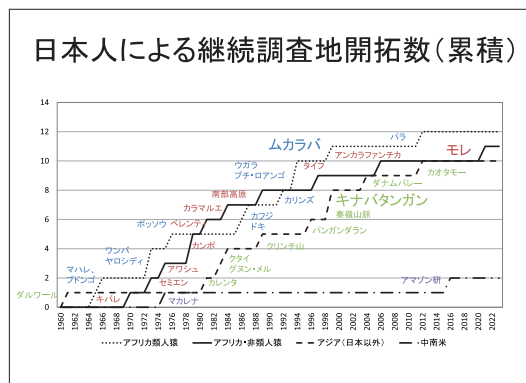


図 1

らパラという所で大橋岳さんが割と個人的に、小さなチームですが新しい所でされているということがありますが、やはり 2000 年以降、ムカラバ以降は新しい所という形にはなっていません。

次に、実線で示したのがアフリカの非類人猿です。アフリカの非類人猿は河合雅雄先生が調査隊としていろいろ新しい所を始められていて、キバレや、エチオピアのセミエン、アワシユの辺りでゲラダヒビの調査、そしてマンドリルの調査がカメルーンのカンボ、ここにマダガスカルも入ってきています。小山直樹先生のベレンティヤ、カラマルエは大澤秀行先生のパタスのフィールドで私も行った所ですが、こういう形で増えてきています。

ただ、これも 2000 年の少し前からあまり増えなくなっています。アンカラファンチカはマダガスカルで佐藤宏樹さんがやられている、これは元々は鳥の調査地だったのですが、そこに霊長類研究者が入るということで一応カウントしています。ただ、詳しい方にはクエスチョンマークがいろいろ入っておられる方もいると思いますが、類人猿の調査地で非類人猿を調査するというのはカウントしていません。それは類人猿の調査地としてしかカウントしていません。最後に、比較的停滞していた、増えていなかった中で、モレでの調査を半沢さんと私が始めたというものが入っています。

最後に、一点鎖線で示された南米に至っては、先ほど名前を挙げた伊沢先生のマカレナ以降なくて、比較的最近、若い院生さんがブラジルのアマゾンの研究所の裏の森みたいな感じの所ようですが、そこで始められたというのも一応ここに含めています。

#### # 9

最終的に、コロナがあってみんな行けなかったということもあるので、どこまで本当に継続に入れていいのか微妙なところもありますが、私の認識ではこれぐらいの調査地が現在残っているということです。

#### # 10

これは、私の同級生の五百部裕さんという方が 2013 年に「生物科学」の中で書かれた、「野生霊長類

## II 趣旨説明

研究調査地の運営方法の変化<sup>3</sup>という論考に書かれたことです。

段階が五つぐらいあって、順番に申し上げますと、まず最初は1958年から、先ほど出てきた今西先生がカボゴ基地という大規模な調査基地を建てられて、いったん放棄するところまでが「探検の時代」です。ここではポーターなどを利用して大量の物資を現地に運び込み、立派な基地を設立し、調査を始めていくという時代でした。

その後、カサカティで伊谷さんがチームリーダーを担うようになってからは「単独行の時代」に入ります。カサカティ基地設立からカソゲで西田さんが餌付けに成功するまでがこの時代で、少数の調査者が数名の現地アシスタントと共に、必要最小限のものを自ら担いで広い範囲を歩き回って調査をするという段階です。

第3が「町工場の時代」というふうに彼が呼んでいるもので、これはカソゲでチンパンジーの餌付けに成功したとき以降です。調査基地を維持するための資金の調達や調査基地の運営などを、中心となる日本人研究者が行い、現地のアシスタントと共に自らが資料を収集し、その資料を自ら分析して成果を公表していくというスタイルです。

そして、1990年ぐらいの「転換の時代」を経て、今現在は、特にアフリカの大型類人猿の調査地は「大企業時代」に入っていると彼は言っています。基地の運営には執行部が責任を持ち、この執行部が調査資金の獲得や資料収集の方向性・手段の決定、そして成果の公表といった部分を主に担当する。一方で一般の従業員は、現地での資料収集を主な役割として、補助的に調査基地の運営等に関わる。こういう変化が見られるのではないかとこのころです。

### # 11

ただ五百部さんは、方向性としてはそういう方向、大規模化・国際化なのですけども、やはり1980年は私も五百部さんも大学院に入ったぐらいの時代であり、割とノスタルジーに浸っている感じを私自身もしているし、彼もそうなのかもしれませんが、町工場的なやり方で進展させる道はないのか

---

<sup>3</sup> 五百部裕「日本人研究者によるアフリカにおける野生霊長類研究の過去、現在、そして未来」『生物科学』64：67-75, 2013.

---

ということを書いておられます。研究者の力量や研究テーマが重要になってくるだろうということで、逆に言えば、こういうことをきちんとやっていたら何とか町工場的なやり方も可能なのではないだろうかということを書かれていて、この辺は割と共感を覚えました。そういうことが頭の片隅にあって、今日の研究集会になっています。

## # 12

テーマが重要だと言いましたが、ベタなテーマではあるのですが、例えば比較です。これは有名なチンパンジーの文化の比較で、全部が長期継続調査地です。いろいろな道具使用行動を中心とした行動があるかないか、どのぐらいの頻度があるかということで、地域によって違いがあってそれが文化ではないかという、有名な「Nature」に掲載された論文<sup>4</sup>があります。

## # 13

私自身は、比較的最近、パタスの調査を再開するまではニホンザルの地域変異の研究をしていました。抱擁という行動がニホンザルにあるのを発見して、大体私の比較は純野生の屋久島と金華山の比較なのですが、同じ抱擁行動であっても少しパターンが違うとか、これは文化的な違いだろうと考えています<sup>5</sup>。ニホンザルの交尾のパターンも、実は屋久島と金華山で少し違うのです。それは環境適応みたいなところで説明できるだろうと考えています。

最後に、社会の寛容性の象徴として分かりやすいのが、屋久島のサルは大きな岩のところにグジャツと乗っかってお休みするのです。でも、金華山のように普通のサルは、この辺にいたり、この辺にいたり、ばらばらでお休みするのです。休息時の個体間距離が違うということから寛容性の違いがあるのではないかという話をしていて、これはまだ定かではないですけども、割と遺伝的な変異が効いていて、攻撃性に関わるような遺伝的な変異が、適応などではなくて偶然の産物でこうなっているのではな

---

<sup>4</sup>Whiten A., Goodall J., McGrew W. C., Nishida T., Reynolds V, *et al.* Cultures in chimpanzees. *Nature*, 399: 682-685, 1999.

<sup>5</sup>Nakagawa N., Matsubara M., Shimooka Y., Nishikawa M. Embracing in a wild group of Yakushima macaques (*Macaca fuscata yakui*) as an example of social customs. *Current Anthropology*, 56: 104-118, 2015.

## II 趣旨説明

いだろうかという段階です<sup>6</sup>。

### # 14

最後に、アフリカの方に目を向けますと、私がやっていたパタスモンキーは、東アフリカのライキピアという所で長期調査をアメリカ隊がしています。このパタスモンキーは、食べ物となる小さなアカシアがどこにでもあるという少し特異な環境で、食べる時も割とばらばらで食べられるので優劣があまり効いてこない、割と平等的な社会だといわれていたのです。しかし、大澤さんと私たちがやっていたカメルーンのカラマルエという所は、割と普通に集中していいものがばっとあって、ニホンザル的に順位がきちんとあるような専制的な社会であるというふうに、種内変異があるのではないかという研究<sup>7</sup>もしています。

そういう中、ガーナのモレという所に2021年に半沢さんと一緒に行き始めて、ここはまたどちらの調査地とも違う環境にあるパタスですので、そういうこともあってこのモレで調査を始めたということがあります。

### # 15

ということで、この流れでまずはこの後、それぞれの調査地を新しく開拓された若いお二人に話をさせていただきます。まず最初に霊長類学から、半沢さんをお願いしたいと思います。

---

<sup>6</sup> Nakagawa N. "Intraspecific differences in social structure of the Japanese macaques: a revival of lost legacy by updated knowledge and perspective" *The Japanese Macaques*. Nakagawa N., Nakamichi M., Sugiura H (Eds.) Springer, pp. 271–290, 2010.

<sup>7</sup> Nakagawa, N. Despotic wild patas monkeys (*Erythrocebus patas*) in Kala Maloue, Cameroon. *American Journal of Primatology*, 70: 238–246, 2008.

---



## Ⅲ 発表

## 「ガーナ・モレ国立公園におけるパタスモンキーの調査地開拓」

半沢 真帆

京都大学大学院理学研究科

ご紹介にあずかりました京都大学の博士後期課程の半沢真帆と申します。今日はよろしくお願ひします。私は博士研究として中川先生と一緒に今回、ガーナのモレ国立公園という所でパタスモンキーというサルの調査地開拓をしたので、未熟者ながら若手でも開拓はできるのだぞというところを皆さんにお伝えできたらと思います。

## # 1

まず簡単に自己紹介ですが、私は小さい頃から特に野生動物が大好きで、それ一本でここまでやってきたのですけれども、大学も学部のときは、東京にある日本獣医生命科学大学という所で野生動物学の研究室に入っていました。学部時代も屋久島のヤクザル調査隊に参加させてもらったり、あと無性にアフリカのサバンナの野生動物に会いたいという気持ちがありまして、学部のとき、バイト代をためてケニアとタンザニアに、それぞれ野生動物と触れ合えるような所に行って、ボランティアや調査をしてきました。そういう経験を通して野生動物の生態をもっと知りたいと思ひまして、中川先生の研究室である人類進化論研究室に2018年から入りました。

## # 2

では、なぜ開拓を始めたのかというきっかけなのはすけれども、そういったアフリカに対して、サバンナに対して憧れがあり、またサルの研究をしてまいりましたので、アフリカのサバンナでサルの研究



### Ⅲ 発表

をしたという思いがありました。

そのような中で、京都大学野生動物研究センターの村山美穂先生という方が、元々ガーナで研究をされていまして、ガーナ大学の先生とつながりを持っていました。その中で、観光としてたまたま寄ったモレ国立公園という所で、パタスモンキーが、泊まっていたモーターの近くで見られたという情報を頂きました。写真も見せてもらって、意外と人に慣れていそうだなというのが一番最初のきっかけです。そこから中川先生と一緒にブログなどネットに転がっているような情報を探すと、意外とそうやってパタスの写真が所々にあり、観光客が撮った写真なども見つけました。だから、もしかしたら人に慣れている群れがここで見られるのではないかということ、ここで見つけます。

パタスモンキー自体は、中川先生が先ほどご紹介なさっていましたが、野生下の研究は長らくされてきたのですけれども、2005年以降は長期で継続された調査はあまりされていません。また、今回行くガーナのギニアサバンナという植生の所に生息しているパタスモンキーはこれまでほぼ全く研究されていないということで、ではガーナで新たなフィールド開拓をして、パタスモンキーのことについて調べてみようというのがきっかけになります。

#### # 3

「パタスモンキーって何なの？」というのは、霊長類をされている方はご存じだと思うのですが、一応説明させていただきます。このような姿をしていまして、どの辺に生息しているかということ、サハラ砂漠以南のサバンナにいて、西はセネガル、東はエチオピアの方まで広く分布しています。地上性なので、木にも登るのですけれども、普段は地上を歩いて生活しています。群れの構成は、1頭のハレムオスと複数のメスとそのコドモからなる単雄複雌群という群れを形成しています (Isbell (2013))<sup>1</sup>。

#### # 4

このパタスモンキーの調査に向けて準備していこうということで、ここから結構具体的な話なのです

---

<sup>1</sup> Isbell, L (2013) Patas monkey. *Mammals of Africa Vol II (Primates)*, Butynski T.M., Kingdon, J. and Kalina J. (eds), Bllomsbury, London, pp. 256–264.

---

が、若手の、特にこれから開拓をしたいという方の参考になればと思います。

#### # 5

何が一番時間がかかるかということなのですが、経験されている方もいっぱいいらっしゃると思いますが、特に海外調査で一番かかるのが調査許可証の取得です。調査をやってもいいですかという許可証を取る必要があります。それを私の場合はどうやったかという、そもそものきっかけを頂いた村山先生を通して、元々村山先生とつながりがあるガーナ大学の **Owusu** 教授とカウンターパートとしてつながりを持たせていただいて、この方と共同研究をするということで、モレで調査をしていいかという相談と、こういうことをしたいのですという計画書をまず送りました。

そして、やりましょうということでお返事を頂いて、**Owusu** 教授を通して調査地に紹介していただいたのと、調査許可証の発行元である機関に許可証の依頼をしていただきました。結局、管理機関からその調査許可証を頂くまでには、私の場合は約半年かかりました。

#### # 6

この他に、これは本当に国によったりするので一概に言えないのですが、特に予防接種を打つ間隔がすごく時間がかかるので、種類によっては1年ぐらいかかってしまうものがあるので、余裕を持ってスケジュールを立てる必要があります。私が行ったガーナの場合は、特にイエローカードを入国時に出さなければいけないので、黄熱病のワクチンは必須でした。その他にも動物に触れる危険性や、アフリカは特にいろいろな怖い病気がありますので、そういったものを含めて、いろいろなワクチンを受けてから行きました。お金は大体10万円ぐらいかかっています。これにプラスして、もちろんですが海外旅行保険にも入って行きました。

#### # 7

これも学生の皆さんによりますし、大学によると思うのですが、渡航届というものを学内に出す必要があります。私が最初に行ったときはまだコロナ禍の状況で、大学もようやく渡航許可が下りたところだったので、とはいえ、すごくページ数が多い項目を埋めなくてはいけなくて、中川先生と結構

---

### Ⅲ 発表

苦労しながらも埋めて、何とか行ったという形になります。この他にも、外務省には「たびレジ」やオンライン在留届を出す必要があります。

#### # 8

こういう書類的な準備をしつつ、情報収集も同時にする必要があります。まずは調査地についてです。誰に聞いたかという、私はやはり調査地のトップであるパークマネジャーにメールで調査の時期や内容をまず説明しました。その中で、調査にかかる資金、具体的には入園料や宿泊費、調査費がどのぐらいかかるか、そもそもどういう場所に住めるか、長期なので物流や食べ物、アクセスがいいか、ネット環境、また長期の場合は結構これが重要だと思うのですけれども、自炊ができるかということも聞きました。

もちろんいろいろ聞くのですが、アフリカあるあるかもしれないのですけれども、すごく対応は良くて、返信が2、3日で来る時はあるのですけれども、内容がすごくあっさりしているので、結局頂ける情報は本当に最低限のものでした。ですので、いろいろな状況をイメージしながら対処法を考えておく必要はあります。

#### # 9

その他に、そもそもガーナ全域についても情報を収集します。これはもちろん治安だったり、いざけがや病気をしたら調査地から一番近い医療機関はどこかというのは知る必要があります。これはガーナの大使館のホームページや保健局などのネット上の情報からも分かります。

それにプラスして私の場合すごくありがたかったのが、ガーナ在住の国連職員の方と顔をつないでいただくことができたことです。このように、現地に住んでいる、あるいは住んだ経験のある日本人とつながれると、だいぶ細かい質問をして信頼性のある情報をたくさんゲットできるので、これが大きいと思います。また、首都から調査地までの行き方や、調査地から食料を買い出す先へのアクセスなどを調べました。

---

## # 10

その他に、私の場合は中川先生ですが、他の調査者や協力者がいる場合は情報を共有していくことも大事です。私たちの場合は Google ドライブに常に上げておいて、項目ごとにフォルダを作りまして、必要書類や現地の情報や予算、計画表などを常に共有して、お互いに随時アップロードできる環境にしています。

## # 11

こういういろいろなことを済ませて、コロナとも闘いながら、ようやくガーナに行くことができました。

## # 12

やはり日本からアフリカはすごく遠くて、ドバイ経由で行ったのですけれども、それでも行きは2日ぐらいかかたりします。日本との時差も大きくて、9時間あります。ガーナは、そもその気候は熱帯性気候なのですけれども、4月から10月が雨季、11月から3月が乾季に分かれています。

ガーナの場合、すごく助かったこととしては、英語が公用語であるので、村の本当に地方のおばちゃんですえも英語が通じるところがすごく大きかったです。コミュニケーションは取りやすかったです。

## # 13

こちらが首都の様子です。アフリカでいろいろなイメージをされる方もいると思うのですが、ガーナは経済的にもすごく発展している国で、首都に関しては本当に全然不自由がない、東京と近いような便利な都市でした。町中のスーパーへ行くとキッコーマンのしょうゆもありますし、ポン酢など日本のものも幾らか手に入ります。中国人がやっている食料のお店があり、これは色が変わり果てているのですが、一応日本酒なども置いてあるぐらいです。中華調味料など地方では手に入らないものを首都で買い込んで、調査地に行くということをしています。

---

### Ⅲ 発表

#### # 22

首都では、先ほど紹介した、カウンターパートとなっていたいただいたガーナ大学の Owusu 教授と、挨拶とミーティングをしました。これを調査地に行く前と日本に帰る前に会って行っていました。ガーナ大学もすごくきれいで、立派な敷地にありました。

#### # 15

どこに行くかということですが、ここが首都のアクラになります。ここから最初の調査地には、車を購入して車で行きました。北部の一番大きい町であるタマレという所までは、車だと 11 時間かかります。ただ、ここには国内線もあるので、飛行機だと 1 時間ほどで着きます。この北部の町のタマレという所からさらに車で 2 時間半ほど行くと、調査地であるモレ国立公園に着きます。

#### # 16

こちらが、北部の中では一番大きい町のタマレです。これが空港の様子で、町中もちろん首都に比べたらすごく田舎っぽいですけれども、少し大きいスーパーマーケットも一つありました。先ほど言ったように食料は、長期調査だと本当に日本の調味料などをケチりながら過ごさなければいけないのですけれども、そんなひもじい思いは 2 度目の所でしたくないなと思い、できるだけ首都のアクラで買い込んで、それを高速バスに乗せて、タマレで受け取るということにチャレンジしました。しかし、日本人の方はされたことがなくて、「ロストバゲージするよ」と言われていたのですけれども、無事に届いていたのを見てちょっと感動しました。

#### # 17-18

タマレからモレ国立公園まではひたすら車を走らせて行きます。途中で白ボルタ川を渡ったり、道中に牛がいたりしながら果てしない道を走っていると、調査地まであと 5 分ぐらいという最寄りの村のララバンガという場所があるので、ここまで来るとようやくモレ国立公園の看板が見えてきます。

---

## # 19

ようやく着いたということで、これが最初の入り口の所なのですからけれども、モレ国立公園に着きました。

## # 20

ここからはモレ国立公園の中の話になります。どういう動物がいるのかということなのですからけれども、ガーナの中で最大の国立公園で、いろいろな野生動物の貴重な保全地域としても注目されています。私が実際見られたのは、ハイエナは夜なのですからけれども、アンテロープやイノシシなどはよくいます。ヒョウも夜になると見られたりします。

## # 21

サルについては、パタスモンキーはもちろんなのですが、その他にアヌビスヒビヤグリーンモンキー、それからこちらの2種はなかなか見られないのですけれども、国立公園内にはモモジロコロブスとショウガラゴも生息しています (IUCN (1993))<sup>2</sup>。

## # 22

モレ国立公園の一番の売りがゾウです。恐らくこれはマルミミゾウなのですからけれども、歩いてサファリに行けるというツアーがあって、そうすると観光客は大体20m ぐらいという本当に近い距離で、人にも慣れたゾウを見ることができます。

## # 23

私はどんな所で暮らしていたのかということなのですが、国立公園の中に住んでいました。こういった住居みたいなもの、平屋が連なっているようなエリアがあって、これは国立公園内のシニアオフィ

---

<sup>2</sup> IUCN (1993) A Zoological Survey in Mole National Park. North-western Ghana Part 1 Large Mammals. IUCN Report 139 (1): 1-87.

---

### Ⅲ 発表

サーたちがそれぞれ住んでいる所なのですが、そのうちの一つがたまたま空いていて、ここを使っているよということで、このような外観ですが、使わせていただきました。

ここには野生動物もちろんいますので、朝起きるとイノシシが寝ていたり、人に慣れたヒヒの群れがよくこの辺をうろついでいて、われわれも最初に洗札を浴びたのが、鍵の掛け方が甘いと、開け方を学習しているので全部入られて、キッチンのを荒らされて、糞まみれにされたり、洗濯物も取っていかれて、帰ったら木の上に引っかかっているといったことがあったり、そういう結構厄介なものとしていましたけれども、野生動物に囲まれて暮らす生活はすごく楽しかったです。

#### # 24

どんな所に住んでいたのかという中の話なのですが、予想以上にすごく広くて快適でした。左上がりピングです。各家の外にタンクがあって、水道は流れるようになっています。ただ、この水は飲めないので、食器洗いや水浴びはここでしていたり、あとはトイレに使っていました。飲み水は買っていました。一番良かったのは、冷蔵庫が備え付けであったので、水を凍らせて調査地に持っていけるといのが暑い地域では一番ありがたいことでした。料理はガスを使えるのですが、ボンベのガスがなくなると、そのボンベを持って、近くの村へ行って自分で買ってくるという生活をしていました。便座が最初はなくて、便座っぽいものはないかなと家の周りを探したら、丸いプラスチックがあったので、これをはめて使っていました。

#### # 25

週末は食料の買い出しにダモンゴという村に行きました。車で大体25分ほどの所にあります。土曜になるとサタデーマーケットといって、いろいろなおばちゃんや住民が食べ物やいろいろなものを持ってきてパラソルの中で売るのが、とにかく人がわちゃわちゃしていて、子どもも店番をしてパンなども売っていたりします。こうやって仲良くなると、結構サービスしてくれたりもします。

#### # 26

肉も手に入ります。ただ、北部はキリスト教よりもムスリムの人が多いので、豚肉は手に入りません。

---



です。このハエのたかりまくった牛肉か、冷凍してある鶏肉のソーセージか、骨付きの鶏肉を買って、骨を外して使うような生活をしていました。

果物がアフリカは何より良くて、すごく安い価格、100円以下でパパイヤやマンゴー、パイナップルなど、すごくおいしくて安いものが手に入ります。

石けんや洗剤のような最低限の日用品も、唯一室内にあるようなきちんとしたプティックがあって、そこで買えました。

一番発見として良かったのは、先ほど紹介した最寄りのララバンガという所で養鶏場をやっている人がいて、その人と知り合いになって、毎週フレッシュな卵をここで買えたことです。

#### # 27

こちらが調査中に国立公園でお世話になったスタッフの方々です。こちらの方々は本当にご近所さんで、みんなそれぞれの平屋にいます。すごくお忙しくて、結構偉い方たちなのですが、ヒビが入って困ったときなども含めて、住居トラブルや毎日の会計にすごくお世話になりました。

パークマネジャーのアリは、左の写真の方です。彼はすごく忙しくて、ほぼ国立公園にいないのですが、それでも研究のことに興味を持ってくれたりして、すごく気さくな方でした。

#### # 28

何より本調査ですごくお世話になったのが彼です。調査中は銃を持ったガイドを雇うのが規則になっています。このマーティンという彼を雇っていたのですが、彼が結局、終始ずっと付いてくれて、ほぼ週6日で毎日10時間、サルを追いかけるのですが、その調査にも文句一つ言わずに同行してくれました。彼の師匠の方がいるのですが、この方もすごく、モレ国立公園の中の木本の種類を全て把握しているという方なので、パタスモンキーが食べていた葉を持って行って、「これ、何の種類なの？」と聞いたりすると全部答えてくれるというすごい方です。マーティンは、時には川を渡るために大きな木を持って橋を作ってくれたり、すごく頼れる方でした。

---

### Ⅲ 発表

# 29

これは日本でもそうだと思うのですが、仲を深めるために飲み会に出るといのは結構大事です。スタッフたちも夜な夜な飲み会をして、顔が黒いので暗いとほとんど誰かよく分からないのですが、それでもこういうことを普段しておくことで、いざというときに助けてくれたりします。

# 30

そうやって仲良くしてもらって、ガーナで2回、アフリカンなクリスマスを味わったりしました。

# 31

このようにして、調査地にかかる費用はどのぐらいかを計算したのがこのとおりになります。ひと月で大体、私の場合は家賃やガイドの謝金などを含めて9万8000円ほどかかりました。

# 32

ここからはフィールド調査についての話です。

# 33

まず、パタスモンキーの調査を始めるに当たって、群れの発見と、どの群れを追うかという選定から始まります。運がいいことに調査2日目でパタスモンキーを、30mぐらいですが観察することができました。群れによっては結構最初から近くで追える個体もいました。そういう中で、実際に自分たちが追えるような地形にいるかどうかや人慣れの具合を見て、調査対象とする群れを選びました。

# 34

そうやって群れを決めた後は、毎日できる限り追い続けるということをしました。そうすることで、ロストせずに追える時間が長くなったり、個体との距離が近くなったりして、近くで観察できる個体の数が増えていきます。1カ月半後には、大体10時間ぐらい安定して追えるようになりました。

---

# 35

ハレムオスもこのぐらいの距離で見ることができます。

# 36

群れが大体慣れてきたら、次は個体識別をしようということなのですが、パタスモンキーの場合、どの辺で識別するかというと、まずメスは乳首の長さです。またオス・メス共通ですが、やはり顔です。パタスモンキーは頬の毛の濃さ、黒いラインの濃さや形が違ったり、鼻筋の色が違うので、この辺で識別しています。顔にあまり特徴がない個体に関しては、尻ダコの形や色を指標にしました。

# 37

そうやって誰かということが分かったら、ではどの個体が血縁なのか、どちらの個体が優位なのかということ推定していきます。社会的な順位に関しては、敵対的な交渉であったり、場所や食べ物を巡ってのサプラントで推定しました。同家系かどうかということに関しては、毛づくろいや近接を指標に推定しました。

# 38

そうして、人付けから始めた群れのメンバーですが、2022年にはこれだけのオトナ個体とハレムオス、プラスコドモで計26頭の群れを識別し、慣らすことができました。

# 39

ここで、パタスモンキーがどんなふうにいるかを少し映像でお見せします。

——映像開始——

こういう感じで鳴いて、オスがメスの後を追って、みんなで行って、全速力ではないですけども、結構こうやって走って行ってしまうので追いかけるのが大変な時もあります。

---

### Ⅲ 発表

——映像終了——

# 40

そういうときは行った方向だけを見て、後で追いかけて行くということをして、できるだけロストしないようにしていました。

あとは、どういう声で鳴くのかということですが。

——映像開始——

これはオトナメスがいて、この声です。これで子供を呼んで、木陰に入っていたのですけれども移動を始めるところです。返事をした子供の個体がいったり、この子供が母親の声に応じて行ったようです。

——映像終了——

# 41

こんな感じでパタスを追っているのですが、もちろんその中で身の危険も気を付けなくてははいけません。モレで特に気を付けるべき相手として、毒ヘビであったり、先ほどゾウが売りと言いましたが、本当にパタスを追っていると、意外と静かでいきなり近距離にいたりするので気を付けなくてははいけませんでした。

私が結構やられていたのがツェツェバエです。ツェツェバエは本当に刺されると痛くて、吸血昆虫なのですけれども、その後すごくかゆくて痕がなかなか治らないという厄介者ですが、眠り病の媒介者でもあるので気を付けなくてははいけませんでした。

# 42

もちろんアフリカですので、暑さもきついです。

---

# 43

私が入った中では特に3月が一年で乾季で最も暑くなる月でした。パタスはこうやって日陰に入れるのですけれども、人は入れないような形なので、その中でも毎日3Lの水を持ってフィールドに行くような、結構過酷な生活もしていました。

# 44

ただ、調査地で困難なものもありまして、なかなか見たかったものが観察できないということが起こります。これは新しい調査地でしか起こらないということではないと思うのですけれども、やはり情報が少ないので、よりそういう事態は起こり得ます。

# 45

そういったときに新たな研究テーマを現地で考える必要があるのですが、私の場合は、パタスを見て、群れがすごく広がって動いている。でも、群れとしてのまとまりは維持していて、ではこれはどうやって維持しているのかということが気になって、探して、これを研究テーマとして新たに現地で設定しました。

# 46-47

見ていく中で気になる行動が二つありました。木にちょくちょくパタスがこうやって登って、周りをキョロキョロ見る、モニタリングのような行動が見られます。こういう行動を頻繁にすることで視覚的に相手の位置を把握しているのではないかというのと、先ほどビデオでお見せした、音声によって自分の場所を相手に知らせることなどを使って、パタスモンキーは群れのまとまりを維持しているのではないかということを検証しているところです。

このように予備観察で得た印象や興味深い行動、それだけではなくて、やはりパタスらしさみたいなところを、新しい土地だからということだけではなくて、考えるということが重要だと思います。

### Ⅲ 発表

# 48

今回、GPSも着けて、群れの広がりも把握しながら、先ほどのことを博士の研究として調べているところです。

# 49

長くなりましたが、最後に私から伝えたいことは、もちろん場所によりますし、運に恵まれていた環境があると思うのですが、意外とやろうと思ったら開拓はできるということは伝えたいです。ただ、やはり情報の収集や、協力者とこまめに共有することが大事であり、現地の人とどうやってつながれるかということも大事だと思います。ただ、一度行かないと分からないことがほとんどだと思うので、あまり身構え過ぎずに、時には現地の人に頼ることもすごく大事だと思います。

何より私の人生経験の中でも本当に今回はかけがえのない体験になりましたし、研究者としては今まで世に知られていない新しいことや、行くことで独創的な発想を生むチャンスにもつながるので、ぜひ開拓をいろいろな方がやっていけたらいいなと思います。

# 50

本研究は以下の方々の協力をお借りして実施いたしました。また資金の一部は今回、河合さんが代表の科研費を使わせていただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。

長くなりまして申し訳ありません。ご清聴ありがとうございました。

(中川) 半沢さん、どうもありがとうございました。質疑はもうお一方、今度は若い文化人類学者の方にお話しただいて、その後まとめてお受けするというにさせていただきます。

それでは、引き続きまして東京外大のアジア・アフリカ言語文化研究所の今城尚彦さん、彼は今日急きょ体調を崩されたので、オンラインでご講演いただきます。では、今城さん、お願いします。

## 「トルコ共和国におけるアレヴィーの調査地開拓」

今城 尚彦

東京外国語大学大学院総合国際学研究科

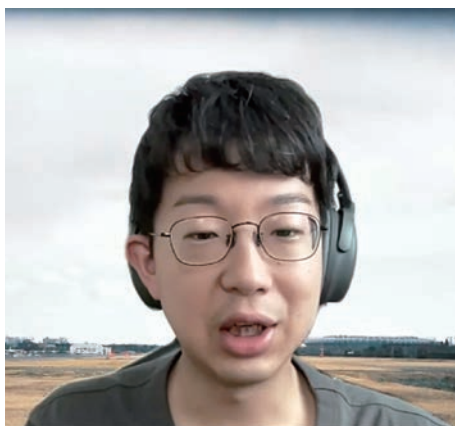
ありがとうございます。東京外国語大学のアジア・アフリカ言語文化研究所とおっしゃっていただいたのですが、私は大学院博士後期課程の今城尚彦と申します。本日は風邪を引いてしまいまして、自宅からオンラインで参加させていただくことになりました。お聞き苦しいところがありましたら大変申し訳ありません。その都度ご指摘いただければと思います。

## # 1

私は「トルコ共和国におけるアレヴィーの調査地開拓」という形で発表させていただくわけなのですが、今回お話を頂いたときに、人類学者、人類学の学生はどうやら1人で調査をしていることが多いのではないかということで、それをどうやって開拓しているのかということについて話をしてくださいというご依頼を受けました。そのときに思ったのは、私としては開拓ということをした記憶はあまりないのだけれども、確かに言われてみると海外に調査に行っています。ただ、私が開拓と言ったときに、何をもってそのように言うのだろうと結構考えまして、今回はそれについて考えたことをお話しさせていただければと思います。

## # 2

私が考えていたのは、調査地というのは、「開拓」というイメージはもちろんあると思うのですが、私にとっては少なくとも、たまたま出会って行くものであって、しかも出会ったというのは、1回の決定的な出会いだったというよりは、些細な出会いの積み重ねみたいなものが、その調査地にいるという結果につながっていると。後ほど詳しく言いますが、私にとって調査地の開拓という経験があるとしたら、そういういろいろな偶然の出会いの積み重ねと、研究する意義のある必然的な研究対象ということで（多くは後付けで）その意義を発見するまでのプロセスが、私にとっては開拓といえる



### Ⅲ 発表

のではないかということを考えましたので、それについて発表させていただきます。

#### # 3

私は2012年からずっと東京外国語大学におりまして、博士前期課程までずっとトルコ語をやりまして、博士前期過程で1回、トルコの最大都市イスタンブルで調査を行いました。今回はこの1回目の調査を中心にお話ししたいと思うのですけれども、その後去年の11月まで、もう1回別の所で調査を行いました。これは都市ではなくてもう少し田舎なのですけれども、トルコの観光地カッパドキアの近くにある所で調査を行いました。ただ、今回は最初に入ったときの経験を話した方がいいかなと思ひまして、最初の2017年の調査についてお話しできたらと思います。

一体何の調査をしていたかを申し上げますと、私は専門は文化人類学を一応やっているつもりではあるのですけれども、学部頃からずっとアレヴィーという宗教的少数派、言うならばイスラームの少数派にずっと興味を持ってきました。大体人口の15%ぐらいといわれておりますけれども、トルコにおいては、基本的にはイスラームの中でもスンナ派（多数派）の合意を前提とするといわれています。スンナ派ムスリムが多数派を占めている中で、イラン・イスラーム共和国は、逆にシーア派という、もう一つのイスラームがあるわけですが、それに非常に近い特徴を持っている人々なわけです。

さらに、いわゆるシーア派の中でも主流の人々というよりも、さらに「異端的」な教義があるということから、多数派のスンナ派からは長らく差別をされてきた歴史があります。ここに掲げている絵も調査で撮った絵なのですけれども、これも1993年にアレヴィーの知識人を狙った放火虐殺事件がありまして、それを描いた絵が調査地にも掲げられていました（図1）。

#### # 4

今回お話を頂いたときに、開拓をどうやってしたのかということでお話を頂いたわけですが、最初に正直に思った感想として、私は開拓なんてかっこいいことはしていないと思ったわけです。というのも、霊長類学の皆さまのことを私は全然分かっていないのですけれども、これはいろいろな濃淡はあるかとは思いますが、私が最初に伺ったときのイメージでは、やはり先駆者が最初すごく頑張って、そこで調査可能な関係をつくっていく、場合によってはそこにどんどん後継者が続いていくということを想像



図 1



しました。ニュアンスとして思ったのは、調査可能な場が開かれるということだと思うのです。そのように私は解釈しました。

恐らくこれは対象の違いということがすごくいえると思うのですが、文化人類学の特に入門書などを読んでも、調査する意義、研究テーマさえあれば、人間の住んでいる場所であれば何でも調査対象になり得るというのが文化人類学のフィールドワークではないかと私は思っています。

菅原和孝先生は、元々京大の霊長類の先生だと思えますけれども、『フィールドワークへの挑戦—く実践>人類学入門』というご著書の中で、京大で担当されていた社会人類学調査実習の授業で出してきたレポートであるとか、それがさらに卒論につながったりということを経験した上で、最後に本になされているというもので、非常に勉強になるし、中身としてもすごく面白い本です。その中でいわれているのは、社会人類学調査実習の本の題目、合言葉として、「人生至る所フィールドあり」というふうにおっしゃられたということが書かれています。もちろんその言葉はこの本の中でもっと深掘りされるのですが、極論として調査自体はどこでもできてしまうということを書いてしまうのかもしれないと思います。

調査地は無限にあると考えたときに、「でも待て」と。では、人間の生活であれば何でも調査になるのかというと、必ずしもそうではないというのが私がこれまでいろいろと教えていただいた中で考えていることです。例えば、生活の身の回りををどんどん観察していくというのは、社会調査法などの授業でもやることです。私が実際に受けた授業でもそうだし、TAを担当した授業でもそうなのですから、身の回りのコミュニティを調査するというような課題が出たこともあって、例えば塾のコミュニティであるとかアルバイトや部活動の人間関係を扱うことが多いわけですが、それが何でも研究として意義あるものになるかというと、当然そこまで行くものはなかなかないと。では、何が重要かと考えますと、やはり文化人類学は個別多様な人間の生を、社会を研究することで、われわれの生き方に関するわれわれの認識を変えるようなものとして捉えると、どういったディテールがわれわれの認識、つまりこれは人類学的理論に当たるものだと思いますけれども、それを更新してくれるのが重要であると。

自分のことはさておきながらも、やはりこういったフィールドはどこにでもあり得るわけですが、それが一体どういう面白みを持っているのかということがなければいけない。本来であれば人類学的調査とは呼べないということが、自分ができているかはさておき、周りからいわれることであるわけです。

---

### Ⅲ 発表

#### # 5

けれども、私自身がそういう意識で調査地を選んだかといいますと、全くそんなことはなくて、やはりさまざまな成り行きが重なって結果的に調査地にたどり着いたというのが実際のところですよ。それを正当化する理由付けは後から考えていくということになったわけです。

ただ、これは私だけではなくて文化人類学的フィールドワークにおいては、こういった偶然の出会いや偶発的な出来事の積み重ねを通じてフィールドと出会っている人が、熟練のフィールドワーカーたちの中でも多いということがあります。このAA研の所員の先生方が書かれている『人はみなフィールドワーカーである』という本を読んでもらうと、いろいろな偶然の積み重ねを通じてフィールドと出会っているということが分かるかと思います。

ここまで考えると、「人生至る所フィールドあり」という菅原先生の言葉、キーワードであるとか、どこにでもフィールドはあり得るけれども、それには調査に値する意義が必要であるということはあるかと思います。ですけれども、調査意義というものは最初から分かっているものではない。もちろん私のように丸腰で行くというよりは、皆さんは元々専門的な勉強をされてから当然行くわけですが、その本当に面白い部分というのはやはりフィールドで出会っているということが多くの場合あるのではないかかと思っています。

つまり、今回のお話をどうしようかと考えている中で、いろいろ調査法の話などを読んでいる中で思ったのは、調査地と出会うまでのさまざまな偶然の出会いを、研究する意義のある必然的な対象と多くは後付けの形で考えることができるようになるまでのプロセスを、「開拓」と呼べるのではないかと私は思いました。これがどのぐらい意味があるかはまた別なわけですけれども、私はそのように考えました。

#### # 6

では、私はどういう形でこの調査に至ったのかという話を具体的にさせていただければと思います。初めてアレヴィーという宗教的少数派のことを知ったのは、学部2年生の頃でした。それまで、例えば高校の勉強をする中で、音楽を聴きながら英語を勉強したということは皆さん多かれ少なかれ、ある人はいると思うのですが、私もそういうタイプの人間で、言葉をやる中で音楽やその背景にある文

---

化というものにすごく興味があるとずっと感じておりました、2年生の頃に漠然とトルコの音楽や文化について知りたいということを知っていました。

その中で、いろいろと本を読む中で、ある一つの新書と出会いました。1991年に出た『トルコのもう一つの顔』という、小島剛一先生という言語学者が書かれたものです。特にトルコの非常に混乱した時代に行かれて、その中で少数言語を研究されたという、今考えるととてもリスクなことをされた本だと思うのですが、その人のエッセイに出会いました。

それを読んでいて思ったのは、言葉を研究する中で、言葉が禁止されているという状況がトルコでは長らく続いていた。また宗教的な状況も、世俗主義国家でありながらも単一のイスラーム・スンナ派のみが認められているということが、その本の中でも描かれていたのは、民族的・宗教的な理由で差別・迫害を受けている人々がいるということがそれでよく分かりました。

その中で特に興味を引いたのがアレヴィーという人々です。クルド人やチェルケズ人などいろいろな人が描かれているわけですが、その中でもアレヴィーという人々は、イスラームの人々、ムスリムの人々なのですが、一般的にはムスリムは基本的に1日5回礼拝するというのが、まず義務の一つです。

また、メッカ巡礼を可能な人はする、もしくはラマダーン月という、太陰暦の暦の一つですが、その時期に断食をするというのが基本的にはイスラームの義務なのですが、これらの義務を果たしている人はほほいさないわけです。こんな人があるのだと。また、酒を飲むのもムスリムは基本的にはタブーとするわけですが、飲酒に関するタブーもない。

ここまで行くと、単にいわゆる世俗的な人々なのではないかと思われるかもしれませんが、彼らも非常に独自の儀礼を持っておりまして、楽器を演奏します。ここに掛かっているバーラマという楽器なのですが、この楽器を演奏しながら踊りのようなことをする儀礼があるということが書いてあって、実際に私が見たのは下の写真のような感じで、また後でもう少し写真も見せますけれども、そういうことがやられています(図2)。

非常に「異端的」な実践を行っていることから、トルコの当局から抑圧されたり、もしくはスンナ派の多数派から虐殺されるということが起きていたことをこの本で初めて知ったわけです。次々に興味と疑問が湧いてきた。この中で、私が前から持っていた音楽に対する漠然とした興味が、トルコの抱える



図2

### Ⅲ 発表

社会問題とつながった瞬間だったというふうに思います。

#### # 7

卒論は文化人類学ではなくて地域研究的な形で書いたのですが、それには人類学ゼミに入れなかったというのが大きいのですが、それでもやはり文化人類学にずっと興味があって、実際に調査する人々のことを見たいと思っていたので、2015年に初めてジェムエヴィという集会所を訪れました。この集会所は集団儀礼ジェムを行う場所のことなのですが、そこに行きました。

このときは基本的に全て自費で、アルバイトでためた航空券代を使い、宿泊は友達の家泊めてもらうということではほかからない。その他に海外旅行券や食費がかかったのですが、このときの滞在ではいきなり友人に電話でアポを取ってもらって行ったのですが、いきなり宗教指導者の前に通されて、「何を聞きたいんだい」という形で急に通されて。いきなり言われて完全に固まってしまい、苦し紛れの質問しかできずに撃沈したという思い出があります。実際こんな感じで全然さしたる成果はなかったわけですが、このときの出会いがきっかけで覚えてくれていて、2年後、修士課程に入ってから、ここで長期調査をすることができるようになりました。

#### # 8

実際、2016年に博士前期課程に入って文化人類学を学び始めたわけなのですが、4月に入学し、ほとんど基礎ができないまま12月になって、東京外国語大学の派遣留学プログラムという月額8万円もらえるプログラムがあったのですが、当時クーデター未遂（2016年7月）がありまして、その影響で空きができて、その中に滑り込んで行くことができるようになりました。

そして、いろいろな調査候補はあったのですが、結局2年前に訪れた集会所で調査を行いました。この中で、集会所に若者グループがあって、彼らがセマーという踊りのようなものを練習していました。この音楽、先ほどの楽器の演奏に合わせて反時計回りにぐるぐるぐるぐる回るといいます。これは神との合一、神の愛と一体化するということを目的としてやっているわけです。時間がなくて動画は見せられませんが、こういったことをしている人々がいます（図3）。

元々セマーというのは、集団儀礼ジェムの中で、人々が集まって、まずは指導者の講話があって、い



図3

ろいろなお話があって、最後にこれがガーッと盛り上がって最高潮に達するというもので、その一つの部分が外に出て、教室のような形でみんなで練習するような形でやっているわけです。こういう若者たちがセマーという実践を行っているということを知りました。

## # 9

同時に気付いたのが、この集会所のメインの活動は、本来ここに挙げられているように集団儀礼のジェムというものです。これを行うための場所であるが故に、しかもセマーも本来、集団儀礼のジェムの一部なわけです。それだけを取り出して非常に熱心にやるということを私はすごく不思議に思いました。全然集会所になんて来ない若者がすごくたくさんいる中で、真面目に毎週通ってくる非常に真面目な人々に見えるわけですが、一方でこのメインの活動であるはずの儀礼ジェムに参加していない。これは一体なぜなのかということがだんだん分からなくなってきたわけです。一体なぜジェム儀礼ではなくセマーだけに熱心になるのか。

ただ、調査をしている中では、もっと他にもいろいろな謎がどんどん浮かんできてまして、これは本当に問題にするべき謎であるということに、帰国してから指導教員の先生の指導を受けるまでは気付かず、ようやく論文を書く直前になって、それにどういう意義があるのかということを手稿にできるようになってきました。最終的には制度や政策の問題とつながっているということに気づき、すごく間を端折りましたが、ようやくここで人類学的調査といえるのではないかとこのころまで、つまり調査の意義をそこでようやく発見したというプロセスまでたどり着きました。結局これが論文投稿につながったわけです。

## # 10

ここまで聞いていただいて、僕がやったことは見切り発車過ぎないかというふうに思われた方もいらっしゃると思います。私自身もそう思いました。ですので、去年行った2回目の長期調査ではもう少し関心をはっきりさせようとしたわけですが、やはり調査に行くまでは漠然とした問いしか浮かばないわけです。

ここも端折りますが、結果的には前回の調査を基に、しかも前回の調査の特に偶然起こった出来事を

---

### Ⅲ 発表

さらにまた膨らませるようなことができないかということを考えながら、漠然とした問いに合致しそうな調査地を構想する。その中で2015年、また2017年のときにも2回ぐらい訪問した、また別の調査地が合っているのではないかと思います、調査地を構想しながら、いろいろな資金などに応募して、最終的には松下幸之助国際スカラシップに採択していただき、最終的には14カ月の調査を行うことができました。

ただ、結果を見ていくと、いまだに2回目の調査に関しては、研究意義は何だといわれたときに、漠然としたことしか言えないということがあります。つまり、まだ博論を準備中ですが、いまだに研究意義は後追いをしています。いまだにというか、結局のところ、もう少しきちんとしてやろうと思ったけれども、やはり研究意義の後追いは続いてしまっている。結局、つながっていない点と点、筋が通っていない点同士を後からつなげるしかないというふうに思うわけですが、これは裏を返せば、こうした寄り道がオリジナリティにつながるかもしれないということです。

むしろどういう大事なことが、日々の生活やまさにフィールドにいる・いないに関係なく、ちょっとしたいろいろな寄り道、つまりフィールドにいるとき、いないとき、また特に今までずっと持ってきた関心、その中でもいろいろ紆余曲折があったりして、調査した後にもいろいろな所に行ってみたりする。もちろん定点観測をするわけですのであまり離れ過ぎてはいけないわけですが、別の所に行くことによって、その調査地のことがよく分かるということもあったりするわけです。ですので、ちょっとしたいろいろな寄り道を大事にして、その寄り道がオリジナリティにつながるかもしれないということを考えました。

#### # 11

私からは、これこそが難しい点でもあるかもしれないけれども、醍醐味でもあるのではないかとことを考えました。

すみません、時間が来てしまいました。尻切れとんぼになってしまいましたけれども、私の方からは以上です。ありがとうございました。

(中川) ありがとうございました。私が調査地開拓ということ振って、そこで「開拓」という言葉に

---

だいぶ悩まれたようで、申し訳ございませんでした。文化人類学というのは、確かにどこでも調査地、フィールドが転がっているというスタンスの学問であるというところまで頭が回らなかったのが悩ますことになってしまいましたが、やはりおっしゃるところはよく分かります。結局、いかに研究テーマ、意義というお言葉でしたが、意義がセットになって開拓ということがなされていると思うのであるということ、私自身もだいぶ合点が行きました。ありがとうございました。

#### 質疑応答

(中川) それでは、質疑応答の時間です。少し時間が押しているというか、押したのは私が10分を超えているので私のせいなのですけれども、休憩時間を少し多めに取っていましたので、質疑応答の時間は、できれば10分ぐらいはこのタイミングで設けたいと思っています。

ただ、ここでお願いですけれども、趣旨が若い人たちに開拓を促すということですので、まずは若いお二人にしゃべっていただいたので、質問の方も若い方、若いのは何歳まででしょうか、学生にしましょうか、自称学生の方からお受けしたいと思います。年齢差別という言葉も最近はややこしいのですが、そこはご理解ください。

それでは、オンラインの方も含めて、会場の方も含めて、若い方から若い方に向けてのご質問をこのタイミングでお受けしたいと思います。いかがでしょうか。

(山本) ありがとうございます。京都大学大学院の山本です。半沢さんに質問が2点ほどあります。まず一つ目が、新しく調査地を開拓するというので、私も調査地を新しく見つけたというか、もう入ったのですけれども、やはり困難というか、特に人間関係が大変だなと思うことがありました。長期で調査に入っている場合は、長年の人間関係はだいぶやりやすいのではないかと思うのですけれども、そういった困難をどのように乗り越えられたのかが一つ目です。

二つ目が、個人的な興味関心なのですけれども、夜間の追跡はどうしているのだろう、サルを追跡はどうしているのだろうということがすごく気になったので、教えていただけるとありがたいです。

(半沢) ご質問を頂き、ありがとうございます。人とのコミュニケーションというのは、現地の人とのことですよね。私の場合、長期といっても6カ月ほどなのですけれども、それを2回行ってきました。もちろん調査中、一部は中川さんがいらっしゃって2人で入ったり、他の協力者の方が入ってくださったりしています。

現地の人とは、先ほど紹介したように飲み会をしたり、すごく偉い方々なのですけれども、本当にド

---



アを開けて隣の家にいたりするような感じで、すごく身近でした。皆さんアフリカ人というところがんしゃべりたがって来る人や距離感がすごく近い人など、いろいろな方がいると思うのですが、ガーナの人のイメージとしては、結構日本人に近い感じが多くて、そこまで皆さん、いい意味であまり干渉してこないような感じです。でも、いつでもウエルカムだから、私何か困ったことを言ったりすると対応してくれるし、1週間会わなかったらドアをコンコンとして訪ねてきてくれたりしたので、距離感としては私は長期で入っていてもいやしくて、特にすごく困った人がいるということは、村のおばちゃんなども含めて全然なかったです。それは私の環境がすごく恵まれていたからなのかもしれません。

説明していなかったのですが、私の場合は日中しか追っていないくて、もちろん夜は危険性という意味でも多分許可されない感じです。ナイトサファリなどはあるのですが、観光客なども車の中でしかできないので、私は日中だけ追っていました。

(山本) ありがとうございます。それで見失わないのですか。

(半沢) もちろんパタスモンキーは、映像が粗くて見づらかったと思うのですが、ああやって普段はゆっくり歩くのですが、走られると本当に一瞬でどこか見えなくなってしまうこともよくあります。特に群れ同士が会ったり、観察者には見えていないのですが、何か身の危険を感じて一気に群れが走り出すことがあります。そうすると、できるだけ走るのですが、もちろん荷物の水も重いので、ロストしてしまうのです。ただ、方向だけ見ておいて、紹介したマーティンというすごいガイドの人は目が本当に良くて、見つける能力もすごく高く、ロストした方向まで行って、この辺にいるみたいなことを手分けして探したり、あとはGPSを着けてからはその分、電波で追えるというのがすごく良くて、朝からもあまりロストせずに見つけたりすることができました。

(山本) ありがとうございます。

(中川) 補足しますと、基本的にパタスモンキーは昼行性なので、夜は動かないのです。ただ、完全に

---

### Ⅲ 発表

何もかもストップしているかというのは本当は分からないところではあるのですが、私が昔やっていたカメルーンのカラマルエという所では、午後6時に木に登って寝ます。翌朝、同じ木に午前6時に行くといいます。だから、多分ここのもそんなに動いてはいないだろうと思います。

それでは、他のご質問はいかがでしょうか。どうぞ。

(阿部) ありがとうございます。京都大学の情報学研究科に所属しております阿部と申します。半沢さんと今城さんに1点ずつ質問があるのですが、まず半沢さんからお願いします。

先ほどもおっしゃっていましたが、ガイドのマーティンさんという方が調査を円滑に進める上でのかなり重要なキーパーソンだったのだらうなと感じました。恐らく運転手もなさっていたと想像したのですが、初開拓にしてどのようにしてこんな適任の方を紹介していただくことができたのか、誰にどのような人を探していると表現して紹介してもらったのかを教えていただけたらうれしいです。

(半沢) ありがとうございます。まず運転に関してなのですが、国立公園の中では、公道ではないということも含めて私自身も一応運転してまして、中川先生か私が運転してました。ただ、パタスはブッシュの中に入ってしまうので、結局、パタスが前日泊まった場所の近くに車を置いて、そこから歩いて行くことが多かったので、調査には車はほとんど使っていません。でも、おっしゃられたとおり、本当にマーティンという方はすごく能力も高いですし、文句を言わずに来てくれるところなど、本当に彼の人柄が素晴らしくて。

それをどうやって紹介していただいたかという、そこも本当にすごくて、彼のシニアオフィサーの方たちを紹介したと思うのですが、そのうちの1人のところに所属しているガイドのような形です。要は、上にそういう上司がいるわけですが、その上司の方には飲み友達という感じですが、すごく気さくに普段から接してもらっていて、実は後から聞いたら、一番お酒を飲む人なので、その人が「実は僕が彼を推薦したんだよ」ということを後から言ってくれました。われわれが最初に来たとき、「彼が明日から付きます」という紹介で、「よろしくお願いします」ということで、いろいろな人が入れ替わり入るのかなと思ったのですが、結局彼が終始ずっと付いてくれました。後から聞くと、ガイドの中でも彼は植物を含めて特にすごく知識があり、動物についてもすごく熱心なガイドだと

---

いので、調査者をすごくウエルカムしてくれる調査地だったということが大きかったと思います。

(阿部) ありがとうございます。

(中川) では、今城さんに対して。

(阿部) 私は生き物そのものではなくて、ジュゴンの保護区におけるジュゴンと漁業者の関係のようなことを調べているのですが、今城さんがおっしゃっていた、漠然とした問いを持って調査地に向かうということにはすごく共感するところがありました。これは個人的な感想も挟んだ質問なのですが、漠然とした問いながらも調査資金の調達は必要で、そういう場合に、例えば国際スカラシップに採択されていますけれども、研究意義に悩む中でストーリー構成はどのように考えて書いていらっしまったのが少し気になって、教えていただけたら幸いです。

(今城) これは私向けの質問ということでよろしいでしょうか。これは恐らく私の友達や後輩、先輩など、みんな悩むところだと思うのですが、とはいえ、何も引っかかりがないわけではないのですよね。私であれば宗教のことを研究しております、国家と宗教の関係というふうに考えますと、トルコの事例でいえば、世俗主義という国家が宗教を統制するようなシステムの中でアレヴィーの人々は生きている。国家がそういう世界に関与しないという意味ではアレヴィーの人々は恩恵を受けているのですけれども、一方では国家がどういう宗教の在り方だったら許可するという形で、一方では救われていて、一方では足をつかまれているような状況があるわけです。

私の場合は、申請書を書くとき、具体的にどういうデータが集まるかということに関しては、行く前は当然見えはしないのですが、同じような状況にある民族誌（エスノグラフィ）を読んだり、似たような状況について考察している一種の理論書のようなものを勉強しながら、どういう説明だったら取りあえず合致するかということころまでは、何とか一番近いところまでは、どういう説明だったら今のところ行けるかということころまでは一生懸命考えようという努力はします。ただ、結果的に論文になるほどの意義というか、何とか「面白いね」と言ってもらえるところまでは頑張るという感じです。

---

### Ⅲ 発表

すみません、何か全然具体的でなくて申し訳ないのですけれども。

(阿部) とんでもないです。答えにくいところをありがとうございます。そうですね。手掛かりを何とかつなげて、こうすれば何か答えが出るのではないかというようなところを頑張って探って、そこから。

(今城) そうですね。今回の発表でも、今まで具体的に読んだものや、今まで他で読んだものなどいろいろある中で、何かつながらないかというのを一生懸命探すようなところも今回結構頑張って話そうと思ったところでもありますので、そういうふうに言えばよかったかもしれません。

(阿部) ありがとうございます。

(中川) フロアの方、どうぞ。

(田辺) ご発表ありがとうございました。京都大学人間環境学研究科の田辺清鼓と申します。今城さんに二点ご質問なのですけれども、一点目は、アレヴィーというコミュニティがトルコの中で差別を受けている少数コミュニティであることをおっしゃっていたと思います。そういうコミュニティを調査するに当たって、アレヴィーの人以外ともトルコ国内でコミュニケーションを取られていると思うのですけれども、マジョリティの側からそういう対象を調査することに対してどういう反応を受けていたのかという点に関しまして、伺えればと思いました。

二点目は、開拓というところを全体から問い直して、人類学的調査の意義をフィールド調査の中や論文形成にあたって見いだしていくというお話をなさっていたと思うのですけれども、そういう場合、「なぜ今、ここで調査しているの？」といった質問を調査中でも現地の方からされることがあると思います。調査地の方にはどのようにご説明されていたのかというところを伺えればと思いました。

(今城) ご質問ありがとうございます。恐らく時間がもう来ているのでしょうか。手短にお答えしたい

---

と思います。

1点目の質問は、多数派の人と出会って話すときということですね。多数派の人に話すときに何か言われるのか、どういう反応をしているのかということなのですから、特にトルコでいうとスナ派の人々が、全員が全員すごく差別的意識を持っているわけではないのですけれども、多かれ少なかれ何か違うなと思っているところは結構あるというグラデーションの中で、アレヴィーに対する嫌悪感みたいなものもある種すごくグラデーションがあるわけです。それに応じて、自分もどこまでだったらセーフかということを考えながら日々やっています。

例えば、明らかにアレヴィーの「ア」の字を聞いただけで、何かもうウーッと拒否反応を示す人もいるし、「彼らは理想のトルコ人だ」というふうに言う人もいるし、「彼らはすごくモダンで」とか、「宗教屋みたいな野蛮な人々よりは」みたいなことで逆に肯定的に捉える人もいるわけですから、その肯定的な人の中にも若干の誤解や差別意識が入ったりする場合があります。そういう中で、変に逆なですると面倒なことになりかねないので、その人とどのぐらいの親しさであるかにもよりますが、大して親しくもない人だったら適当に流すこともあります。そして、自分が研究している中でも、例えばアレヴィーという人々がいて、その人たちの民謡に興味があってというふうに言うと、実際興味がないわけではないので自然に音楽の話になるし、宗教の話題になると、「おまえの日本の宗教は何なんだ」と、日本の宗教状況についての話になったりします。

そのように、相手がどういう意味で聞いているのかということを考えながら、こんな人に対してはこういうふうに言うように、一から十まで全部しゃべるといことはしないというくらいのことだと思います。

2点目の質問をもう一回お願いしていいですか。

(田辺) はい、漠然とした意義みたいなところのお話があったと思うのですけれども、実際調査中には調査地の方にはどのように説明をなさっていたのでしょうか。

(今城) 調査地の人には、1回目の調査のときは本当に漠然と、実際うそではなかったのですけれども、「あなたたちのことを知りたい」という感じでストレートに言ってはいました。ただこれは、調査地に

---

### Ⅲ 発表

よってあまりいい言い方ではないと思うのですが、私が行った調査地の場合は、ある種の文化協会、アソシエーションだったところもあって、割と「われわれのことを知ってくれ」という姿勢が強かったところもあって、割とそれが合っていたところがあります。

二つ目の調査の場合は、調査地に入る前の予備調査というか、下見というか、1回遊びに行ったときに感じた違和感みたいなもの、その場所に行った違和感みたいなものを正直に話したときに、割とそれはあるねという感じになりました。例えば2回目の調査では、ある種聖地みたいな所、巡礼地みたいな所に行ったのですが、そこに外から来る人と中にいる人の態度の違いのようなことに興味があると言うと、確かに違うねという感じで、現地の人でもそこは割と共感してくれました。現地の人もある種共感してくれるような言い方を考えたというか、調整してそういうことを考えている感じですが、むしろそれを考えることも、調査意義を具体的なレベルで考えるための一つの練習というか、必要な作業だったのではないかと私は思います。すみません、長くなりました。

(中川) 活発なご議論をありがとうございます。そろそろ時間ですので、ここの質疑応答はここまでにしたいと思います。中堅以上の方はまたいくらでも時間がございますので、次の機会にご議論願います。

それでは、少しだけトイレ休憩を取りたいと思います。今、47分ぐらいだと思うのですが、55分まで、8分だけトイレ休憩を取りたいと思います。55分に再集合ください。オンラインの方も55分まで休憩です。では、よろしくお祈りします。

——休憩——

(中川) それでは、予定の時間になりましたので再開したいと思います。これ以降は、中堅以降の方の開拓の話を、それぞれ霊長類、そして生態人類の方から話をさせていただきます。

まずは霊長類の方です。松田一希さん。京大の野生動物研究センターです。松田さん、お願いします。

## 「マレーシア・キナバタンガン地域におけるテングザルの調査地開拓」

松田 一希

京都大学野生動物研究センター

ご紹介ありがとうございます。「テングザルの調査地開拓」ということで、京都大学野生動物研究センターの松田が発表させていただきます。

## # 2

まず最初に簡単に自己紹介ですけれども、世界の熱帯林でサルの研究をしてきました。最初はコロンビアでやっていたのですが、その後マレーシアに移って、マレーシアのボルネオ島でテングザルの研究を長らくしています。その間、マレーシアでの研究を継続しながらも東アフリカのウガンダなどでアピシニアコロブスというサルの観察もしながら今まで研究をしてきました。

## # 3-4

研究スタイルとしてよく言っているのが、「足で稼ぐパワーエコロジー」だということです。パワーエコロジーというのは造語で、ちゃんとした言葉ではありません。私が北海道大学にいたときの先生が、うちの研究室はみんな非常に泥臭い研究ばかりをしていて、効率の悪い、ずっとフィールドにいて何か観察するような研究をしているのを見て、「根性の生態学だ」ということを言っていたのを少しかっこよく、「パワーエコロジー」という言葉にしたのがこの語源です。

私なりにこのパワーエコロジーの「パワー」というものを解釈すると、やはりそれはフィールドにある力、例えば双眼鏡とペンだけで無限に広がるような可能性や、誰も見たことがないとか、自分が一番最初の目撃者になれる野生動物の見せる奇跡の一瞬を信じてフィールドに飛び込む力や、人と人のつながりが生む力ですよね。フィールドにいと必ず自分の非力さを思い知り、いろいろな人とつながって研究しないといけないと思うわけです。それがあ意味いろいろな力になっていくというようなものが、このパワーエコロジーのパワーにあるのかなと思っています。



### Ⅲ 発表

基本的に面白い発見はフィールドにあるのではないかと今でも思っています。ひたすら歩いて、見て、感じ取る。これが研究者にとって一番大事な力だと思っている、「発見できる力」につながるのではないかと今になって思うとすごく感じるところです。

#### # 5

いろいろな研究をしてきましたけれども、今回このシンポジウムに呼んでいただいたこともあるのですが、一番大きな成果と自分で思っているのは、18年間マレーシアのキナバタンガンという所で長期調査をして、調査地を維持していることではないかと考えています。

#### # 6

ただ、なぜサルの研究をすることになったのかというところから話さないと、なぜこんなサルの長期調査をしているのだということにつながらないので、そこを話そうと思います。実は僕は同志社大学の工学部出身なのです。卒論のときは全く動物と関係ないセラミックスで、モリブデンという物質があるのですけれども、それを一日中こねて、それを焼いて、もう一回破壊して硬さを測るという研究をしていたのです。とにかく厳しい研究室に配属されてしまって、必ず朝8時半に行かないといけないという厳しい研究室でした。単位が必要だったので、大学4年になってきちんと真面目に大学に行く生活になったわけですけれども、毎日同じ時間に行くと必ず同じ先生に同じ場所で会うのですね。

それが隣の教室の先生で、西邨顕達先生というサルの研究をしている先生だったのです。何か月も挨拶する程度だったのですけれども、あるときその先生に声をかけられて、「君はアマゾンに興味があるか」ということを聞かれて、「ああ、アマゾンですか」という話になって、その先生のされている研究の話聞いて、「えーっ、アマゾン、ちょっと見てみたいです」ということを言ったら、「だったら、修士になる前にまず一度来てみないか」と誘われて、何も分からないまま、そのフィールド、アマゾンのコロンビアに行きました。それが人生で初めてのフィールドワークで、元々動物が大好きとかサルが大好きだったわけではなかったので、本当に野生のサルをちゃんと見たのは、コロンビアに行ったときが初めてでした。

---



# 7

やはりコロンビアの森の中は日本の森とは全く違う環境で、ものすごく衝撃を受けたというか、森がものすごくきれいだったし、こんな生き物は見たことないというものがいっぱいいて、何十年前ですけれども、今でもすごく記憶に鮮明に残っています。

その当時は、西邨先生が研究していたクモザルというサルを一緒に探したりして観察しました。クモザルというサルは、群れで暮らしているわけですが、彼らは縄張りの中を、群れの中のメンバーが小さな小集団（パーティ）に分かれてくっついたり離れたりするのです。これはなぜかという、彼らは果物が大好きなので、果物は季節性があるため、たくさん森にあるときもあれば、それが少ないときもある。特にたくさんあるときはいいのですが、ないときは群れのみんでその果物を食べようとするとき争いが起きます。そういったものを避けるためにクモザルは、果物が少ない時期は小さな集団に分かれて縄張りの中を小集団で移動して、あるときはくっついてということを繰り返すのです。

私が行った時期は果物が少ない時期だったのです。こういうときは非常にサルを見つけにくいと言われていて、先生にも「なかなか見つからないぞ」ということは言われていたのです。そして何日か一緒に森を歩いて、「そろそろ君も山を1人でちょっと歩いてこい」という話になって、「では僕は、こっちにサルの群れがいそうなので行ってきます」と言って行くと、サルがいるのです。そして帰ってきて、「先生、出会えました」「おお、そうか」と。そして次の日は「こっちに行ってみます」と言って行くと、またサルがいるのです。そしてまた帰ってきてということをして、2週間ぐらい毎日出会えたのです。その先生は、そんなに頻繁にサルは見つからないだろうと思っていたみたいで、ものすごく驚かれました。

そのときに言われたのが、「君には動物運がある。同じだけ森の中にいても、動物に出会える人間と出会えない人間がいるのだ。君はすごい才能を持っているな」とものすごく褒められたのです。長らく褒められていなかったのも、ものすごく舞い上がってしまって、これはもうサルの研究をするしかないと思って、修士の道に行くことになった、というのがサルを研究するきっかけでした。

### Ⅲ 発表

#### # 8

ただ、コロンビアは情勢が当時はまだ不安定で、なかなか継続できない、場所を変えなければいけないということになりました。さらに、全く調べていなかったのですけれども、うちの研究科は博士課程がなかったのです。ですので、どこかの大学に行かないと研究できないことが分かって、これは困ったということになって悩んでいたわけです。

#### # 9

そのときに見た映像が、このテングザルの映像です。このようにテングザルがジャンプして川に飛び込む。このサル映像を見て衝撃を受けて、こんなサルが世の中にいるのだと思ったのです。これは15m、20m ぐらいの所から飛び込むわけですけれども、鼻もこんな鼻で、こんな奇妙で謎めいたサルがいるなんて信じられないなと思いました。

#### # 10-11

そのときのテレビのナレーションで、「このサルの生態は謎に包まれています。なぜなら、ボルネオ島の密林の中の川沿いや海沿いの非常にぬかるみの激しい所に住んでいるので、誰も追跡できません」ということを言ったのです。そのときにぱっと浮かんだのが、「君には動物運がある」ということです。先生に言われたこの言葉を覚えていたので、僕になら絶対に追跡できるのだということを、何の確信もないのですが思ったのです。それで、テングザルを研究しようということに決めたわけです。

#### # 12

けれども、他の大学に移るときに、「テングザルは誰もやっていないので、何かやったら新しいことが絶対分かります」と言ってもなかなか受け入れてくれる先生がいなくて、いろいろなところを転々として話を聞きに行き、ようやく見つけたのが北海道大学の東正剛先生の研究室でした。

先ほどの映像はNHKのテレビだったのですけれども、そこに北大の学生で僕の先輩の村井さんという人がいて、彼がボートからテングザルを観察していたのです。ですので、村井さんにまずコンタクトを取って、東先生とつないでほしいということをお願いしました。村井さんという方は、博士課程の時

---

の研究を終えてから4年間ほど現地フィールドに行っていなかったため、テングザルの研究は継続していなかったわけですが、指導教員の東先生は、学生がテングザルの研究をしてきたという実績があったことや、先生ご自身の専門がアリやハチの社会性昆虫だったため、社会性という点では「アリ・ハチの真社会性とサルの社会性にそれほどの大差はない、だったらサルの研究も指導できるだろう」と思われたのかもしれませんが。指導教員になってもらいました。

非常に面白い研究室で、村井さんのようにサルの研究をしている人もいるのですが、それ以外にアリやハチはもちろん、マレーグマとか、同期だとクマムシ、あとはユキヒヨウ、ウミガメなど、ものすごくいろいろな研究をしている学生、先輩、ポスドクの人が集まっている研究室でした。

#### # 13-14

研究室の方針としては、自分の好きな研究をやっていると言われていて、僕はテングザルをやりたい、追跡できると思ったのでテングザルをやると決めていたわけですが、今になって思うと、こういうあまり研究されていない動物を研究することの一番いい点は、読まないといけない論文が少ないということに尽きると思います。チンパンジーやニホンザルなど非常に多くの研究が過去にされている動物を研究すると、読まないといけない論文がいっぱいあります。その中から自分の新しいテーマを見つけられない。でも、研究されていない動物は、2、3本の英語の論文を頑張って読めばほぼ分かってしまう。研究があまりやられていない動物を研究することは利点があるのです。

ただ、どこでどうやって研究したらいいのか誰も知らないというのが一番厄介です。あとは、一から全部やらなければいけないというところはもちろん大変なところではあるので、いいところ、悪いところはあるわけですが、僕は当時はいいところしか見ていなかったのです。

#### # 15

テングザルを探しに2005年、博士課程の学生のときにボルネオ島に行きました。幸い先輩の村井さんがテングザルの研究をしていたので、その先輩がしている辺りに行けばサルはいるだろうということで、当時片道のフライト切符だけを買って行って、帰ってくる日を決めなかったのです。どのように大学に申請したのかも全く覚えておらず、指導教諭の先生もよくそれを許したと今になって思うと、

---

### Ⅲ 発表

ある意味感謝していますけれども、自分の学生が「いつ帰ってくるか分かりません」と言い出したら、「じゃあ行っておいで」と言えるかどうかというと、少し悩むと思います。ただ、本当に片道の切符だけ買って、現地に行って調査を開始しました。

#### # 16

いろいろ調査を開始するまでが大変だったのですけれども、住む所は現地の NGO の人と話をして、森林局が所有している空いている小屋があったので、そこを使わせてもらうことになって、ボロボロの小屋だったのを、自分で床を磨いてニスを塗ったりしてきれいにして、結構快適に暮らせるようになりました。水は雨水しかなく、綺麗な雨水は料理などに使用する貴重なものだったので、水浴びは基本的には目の前に流れている大きい川があったので、そこでしていました。

#### # 17

買い出しなどは、近くの町までは車で当時まだ4～5時間かかったので、そう簡単には行けないということで、週に1回、小さなマーケットが村にあったので、そういったところで食べ物を買ったりして暮らしていました。

#### # 18

目の前に川が流れているので、そこでエビやナマズを捕って食べるということをして、1年半ぐらい過ごしました。

#### # 19

調査開始というか、データを取れる段階になったらほとんど研究は終わっていると今になって思うのですけれども、調査開始までが一番大変でした。やはり何ものでもない学生が1人で現地に行っても、誰も相手にしてくれませんでした。学位もなければ、お金もない、どこの誰かも分からないということで、なかなか相手にしてもらえなくて、いろいろな機関に辛抱強く通い続けて、顔を覚えてもらって、何とか調査許可なども取りました。

---

調査資金は、博士課程だと奨学金が結構もらえるのです。10万円ちょっともらえて、それを全額投入しました。今でも奨学金の返済には苦しんでいますけれども、そのときに奨学金があったので、現地でボートとエンジンを買ったり、現地の調査アシスタントを雇ったりということができました。

それから言葉は、マレーシアも幸い英語が結構通じるのです。最初、僕はホテルの予約もできないくらい英語がしゃべれなかったので、とにかく英語だけはまずしゃべれるようにならなくてはということで、基本的には英語をしゃべれる人をアシスタントにしました。後々はマレー語でしゃべれるようになってきて、非常にスムーズに調査ができるようになりましたけれども、最初は英語ということをやりました。

調査基地は、現地の NGO などの人にかなり親切にしてもらって、先程話したようにフィールドで住む所を交渉してもらいました。それから調査助手は、学生が人を雇用するなどということはまずやったことがなく、今のように AI で「契約書を書いて」と言ったら書いてくれるようなものもなかったので、辞書を片手に下手くそな英語で契約書を作って、それにサインしてもらってというようなことをしました。

#### # 20

研究だけではない部分というか、村との交流が実は非常に大事だったということなのですが、村に住んでいると、村のリーダーに挨拶に行ったり、報告に行ったりして、村の行事に誘われるわけです。バドミントンの大会や結婚式などいろいろ誘われたりして、そういうところに何となく顔を出していく。それが、調査とは直接関係ないのですが、後々になると、そういう関係が構築できたことによって、いろいろな問題がすらすらと解決できたりということがありました。やはりこういう研究ではない部分が調査地をつくっていく、開いていくときには非常に大事なのだということを、今になって思うと感じます。

#### # 21

それから、1年半ずっと住んでいると、孤独なのですが、実は一人ではなかったという話です。パートナーというと聞こえはいいですが、当時は彼女で、今は妻です。ですので、あまり悪いことはし

---

### Ⅲ 発表

ていないのですが、当時のパートナーは彼女だったのですが、彼女は英語がすごく堪能だったのです。僕は英語が全くしゃべれなかったので、彼女に「マレーシアはリゾートで、きれいな海がいっぱいあるよ」ということを最初に話して、仕事を辞めてもらって、1年半ついてきてもらって、研究を手伝ってもらいました。

そして、村人からももらったペットなど、そういったものが結構癒やしになって、1年半ですけれどもあっという間に過ぎていきました。友達や研究者が訪問してくれたり、優しいNGOの人たちに助けってもらったり、あとは環境意識の高い村人たちに助けられながら、1年半、データを取って日本に帰ってくることができました。

#### # 22

フィールド開拓や研究の本質的な面白さとは何だろうと考えたときに、やはり資金確保の難しさなど結構大変なことが多いのです。特にサルの研究ですと応用研究ではないので、これをして何の役に立つのかという世間の冷ややかな視線、「サルの研究をして何になるの」というようなことを親ですら思うわけです。それから、調査地が熱帯なので、病気など困難がいろいろあるわけですが、やはりいろいろな人との出会いや交流から生まれる多様な価値観や人生観が、今思うと今まで長いこと調査を続けている原動力になっているのだと思うわけです。

#### # 23

結局、2005年から開始して、当時学生の頃でしたけれども1年半現地に住んで、ボートも買っているいろいろなデータを集めました。サルをずっと森の中で追跡して行って、気が付いたら3500時間ぐらいサルを観察していたということになりました。3500時間ぐらい観察するものすごく新しいことがいろいろ分かるのだらうと思ったのですが、このテングザルは非常に怠けているというか、ほとんど寝ていて、休んでいたのです。あるいは、葉っぱをよく食べていたということが分かって、ただ、あまり研究されていない種なので、こういうことでも論文になるのです。

---

## # 24

森の中のどこを動いていたかとか、実際には川沿いを動いていたわけですがけれども、川沿いのどの辺を動いているかとか、川から離れてどのぐらいの所まで動いているかとか、非常に基礎的なものが最初の頃にやっていた研究です。

## # 25-26

その後どんどんいろいろな研究をするようになっていって、テングザルの鼻がなぜあんなに長いのかというテーマ、いわゆる性的二型の話や、テングザルの研究が基でいろいろな交流が生まれて、他にもいろいろな研究プロジェクトに誘われるようになりました。例えば霊長類の出産季節性を何百種類という霊長類の中でメタ解析するようなプロジェクトに誘われたり、動物の消化機構、これはテングザルだけではなくていろいろな哺乳類を含めた消化機構の解析のようなものに誘われたり、いろいろな研究をするようになりました。

## # 27

さらに、フィールドだけではなくて、腸内細菌や胃の中の細菌、または機械学習や数理分析といったものを使うような研究もいろいろな研究者と共同研究するようになりました。

## # 28

ということで、フィールドを通していろいろな人とつながったことによって、元々は非常に古典的なサルの観察をしていたわけですがけれども、データ量や解析の複雑さが増えていって、自分ではできないような研究がどんどん開拓されていきました。フィールド研究をしている自分だけではできなかったところでは。

## # 29

さまざまな研究をしてきましたがそういったものの多くは、フィールドの観察データが基になっているのです。異なる分野の研究者をフィールドデータで結んでいって、いろいろな人たちとつながるし、

---

### Ⅲ 発表

いろいろな分野とつながって、多様な研究に発展していったというところがあります。

#### # 30

たった1種のテングザルですけれども、このフィールドを開拓していくことによって世界とつながる面白さというか、いろいろな人と関わる面白さ、そういった部分がフィールドで研究することの一番の面白さだと思います。

#### # 31

最後のスライドです。フィールドには新発見がいっぱいということ、教科書や論文に書いてあることはもちろん大事なのですが、研究やフィールド開拓の醍醐味はそこに書いていないことを発見することですよね。新発見が身近なところにもあるという話です。

#### # 32

例えば、反すう行動という行動を実はテングザルが霊長類で初めてするというのをわれわれが発見したのです。こんなふうに少し気持ち悪そうに、「オエ、オエ」とやるのですが、これは1回食べたものをまた口の中に戻して、飲み込んでというのを繰り返すのです。ウシやシカなど反すうする動物と同じようなことを、実は霊長類でも初めてするのだということのをわれわれは発見したわけですが、実はこの反すう行動は、われわれが発見するよりも何十年も前に、ドイツ人の飼育員の人がテングザルの飼育日誌に書いているのです。「テングザルの異常行動をなかなかやめさせることができない。どうしたらいいのだろう」ということを書いているのです。その人は、同じものを見てもこれが反すう行動だ、面白い発見だということに気付かなかったわけです。

だから、われわれ研究者の「気付き」によって、非常に身近に新発見があるというところが面白くて、フィールドというのはやはり長くいればいるほど、そういう「気づける力」、直感力みたいなものが磨かれるのではないかと思います。直感力というのは結局、自分の直感のように思っているけれども、いろいろな人と関わって、いろいろな意見を聞きながら自分の考えが導かれるので、いろいろな人の話を聞いて関わっていく中で、こういう直感力というものがフィールドの中で磨かれていくのだなというこ

---



とを思います。

### # 33

フィールド開拓というと非常にハードルが高いように皆さん思うかもしれませんが、まずはどこでもいいのでフィールドに行って、自分の研究対象と長いこと向き合って観察するところから始めるのがいいのかなと思います。以上です。

(中川) ありがとうございました。先ほどと同じように、質疑は次の河合さんが終わってからということにさせていただきます。

それでは、次は生態人類の分野から、中堅というよりはシニア研究者として河合香史さんに、冒頭でご挨拶いただきましたこの企画の主催者であるにもかかわらず、ここでもご発表いただくことになりました。では、よろしく申し上げます。

## 「東アフリカ牧畜民の調査地開拓：ケニアのチャムスとウガンダのドドス」

河合 香吏

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

再び登場です。AA研の河合です。よろしくお祈いします。私は1986年から、東アフリカの牧畜社会で生態人類学的な調査研究を続けてきました。これまでに長期の調査をしてきたのは、ケニアのチャムスという人たちとウガンダのドドスという人たちの、二つの牧畜社会です。今日は「海外調査地開拓のすすめ」というテーマですので、それぞれどのようなかたちでこれらのフィールドに入ったか、というお話をしようと思います。

### # 2

これはチャムスとドドスの居住地の写真なのですが（図1）、こうした乾いたサバンナに住んでいる人たちで、チャムスもドドスも、いずれも日本人の人類学者としては私が初めて入った地域でした。チャムスに入ったのは1986年、ドドスは1996年ですので、それぞれ37年前、27年前と大昔の話なのです。この間、ケニアもウガンダも、調査地も人びとの暮らしも大きく変わりました。ですから、私が今ここで、フィールドに初めて入った当時の私の経験をお話ししても、どれほど皆さんのお役に立てるのかとても心許ないところがあるのですけれども、こんなふうに入った時代もあったのだなということでお聞きいただければと思います。

### # 3

これは、先ほど中川さんからもお話がありましたけれども、京都大学におけるアフリカ調査隊の略歴です（図2）。京都大学のアフリカ調査は1958年の今西錦司・伊谷純一郎のアフリカ行きに始まります。今西さんが京大の人文研（京都大学人文科学研究所）にいらした間に、アフリカ類人猿学術調査隊による調査が1961年から1968年にわたって6回実施されました。この調査には、霊長類学者だけではなくて社会人類学者も参加していました。



図 1

これとは独立に、これも先ほど中川さんがおっしゃいましたけれども、田中二郎さんが1966年（図2の1967年は誤り）からカラハリのブッシュマンを対象に生態人類学的な調査を開始されました。このフィールドについては、コメンテーターの高田さんがおそらく詳しくお話しされると思いますけれども、現在も継続している調査フィールドです。

1970年代前半までに、コンゴ盆地のピグミー系狩猟採集民、タンザニアやザンビアの焼畑農耕民、北ケニアの牧畜民へと調査対象が広げられまして、アフリカ大陸を覆う主な植生帯である熱帯雨林、乾燥疎開林——主にミオンボ林と呼ばれているところですが——、それから乾燥したサバンナや半砂漠に生きる、狩猟採集民、焼畑農耕民、牧畜民という、自然により強く依存して生きる人びとの生業や社会が明らかにされていきました。

# 4

それでは、私の最初のフィールドについてお話しします。こちら、チャムスという人びとです（図3）。チャムスのフィールドへの入り方としては、「放り込まれ／放っとかれ型」というふうに名前を付けましたが、あの頃でしたら、けっこう多いパターンだったかと思います。今でもそうなのかもしれません、そういうかたちで入ることになりました。

# 5

アフリカへの誘いはある日突然やってきました。私の大学院での指導教員は先ほどの伊谷純一郎先生だったのですけれども、その伊谷さんに呼ばれまして、「アフリカの調査隊に空きがある。湿ったところがいいか、乾いたところがいいか」と唐突に聞かれました。当時、動いていた調査隊のうち、ブッシュマンを対象としたボツワナのカラハリ隊、北ケニアの牧畜民隊、そしてザイルのワンバ隊——これはピグミーチンパンジー、今はボノボといますけれども、その大型類人猿の調査隊だったのですけれども、同じ地域に住んでいる農耕民を調査してもいいぞということで、このような3つの選択肢を示していただきました。

私は純粹にというか、単純な好みとして乾いている方が好きでしたので、即座に「乾いたところ」と答えました。そうすると、狩猟採集民のブッシュマンか牧畜民かという選択になったのですが、中学・

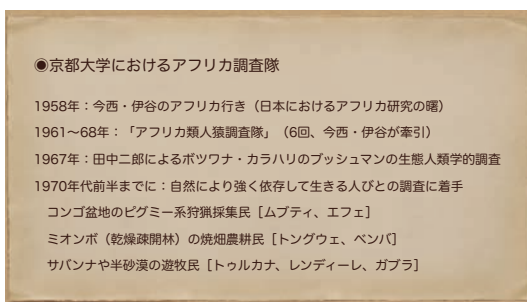


図 2



図 3

### Ⅲ 発表

高校時代に中央アジアの草原の騎馬民族に憧れていたことがあったり、大学の学部時代に実習や卒論で北海道のウシの酪農やヒツジの放牧といったことをテーマに調査研究をしてきたこともありまして、牧畜に関連する調査を続けたいと漠然と考えてはいました。その思いが認められまして、その場で「じゃあ、北ケニア隊だな」ということで、北ケニアに行くことになりました。

北ケニアの牧畜民隊は、「ひとり一民族主義」を採っていきまして、私も同様に扱われることになりました。つまり、先にすでに誰かが調査をしているフィールドに入るのではなくて、新しいフィールドに入る。同じ北ケニアの牧畜民なのだけれども、別の民族集団に入るということを謳っていました。そのようなわけで、私が入る新しいフィールドを探すことになりました。ただ、私のフィールドを探す選択は、あまりすんなりとはいきませんでした。

牧畜民が住んでいるのはほとんどが乾燥した「辺境」の原野です。ケニアの首都ナイロビから車で3日とか4日とかかかる遠い場所で、公共交通はありません。環境は極めて厳しい。でも私は、極限的な環境に生きる牧畜民のフィールドを望んでいました。家畜に強く依存して生きる人びとが極限的な環境で自然とどのように付き合っているのかを知りたかったということがありました。ですが、伊谷さんと、北ケニア隊の当時の隊長だった佐藤俊さんの「老婆心」がそこに立ちはだけりました。

#### # 6

今いいましたように、牧畜民は「辺境」に住んでいて、かつ、数十キロから、ときには100kmを超えるような距離を移動する遊動生活をしています。それについていくには自動車は必須です。ですが、伊谷さんと佐藤さんは、私には車を使わせないと決めていました。車は日本ではあまり壊れないかもしれませんが、アフリカに行った方なら分かると思いますが、すごく壊れるのです。車は、壊れるし、原野でもし壊れたら自分で直せなくてはならない。事故の危険もありますし、現地の人から「車をちょっと出してくれ」と要請が入るなど、何かと苦勞するというのが私に車を使わせないとする彼らの理由でした。従って、車を使わなくても入れる、つまり自力で、何かあったときには歩いて1日以内で最寄りの公共交通機関までたどり着ける、その程度の場所が私のフィールドの条件でした。

伊谷さんと佐藤さんが選んだのは、半分農業もやっけていて半分牧畜をやっている半農半牧民で、先ほど言った移動生活ではなくて、ほぼ定住生活に移行しているチャムスというマサイ系の小さな集団でし

---

た（図4）。当時の人口は6000といわれていましたので、本当に小さな集団でした。これまでの北ケニア隊の牧畜民調査グループの人たちは、農耕が不可能な、乾燥地という極限的な環境で家畜だけに頼って生きる、「だけ」というのはいろいろ語弊はあるかと思いますが、基本的に家畜に強く依存して生きる人たちを調査研究してきたのですが、そうした専業牧畜民だけではなくて、半農半牧という中間帯も見べきだというように、伊谷さんと佐藤さんは私に説得にかかったわけです。私にはそれは言い訳にしか聞こえなかったのですけれども、私の望みは受け入れられることはありませんでした。

# 7

結局、私はチャムスに入るということで、ケニアに渡航することになります。それが1986年の夏でした。このときは7カ月ほどケニアに滞在したのですけれども、私がチャムスのフィールドに入る前に、北ケニア隊の先輩メンバーたち——このときは北ケニアで調査をしているみんなで渡航したのですけれども——それぞれが入っているフィールドを巡るといっか、みんなで訪ねて回り、途中で私の調査地のチャムスのフィールドも探して、決めるというようなサファリ（extensive survey）が準備されていました。一行は、佐藤俊さん（当時、立教大学）、故・原子令三さん（同、明治大学）、太田至さん（同、京都大学）、鹿野一厚さん（同、京都大学）、北村光二さん（同、弘前大学）と奥様の弘美さんご夫妻、そして私の7名で、車2台で18日間をかけて北ケニアの牧畜社会を回りました（図5）。

# 8

訪問先は、最初にナイロビからずっと北まで行って、太田さんのフィールド、先ほど伊谷純一郎の話を出しましたが、伊谷さんと太田さんが開拓されたフィールドであるトゥルカナに行き、スーダン国境辺りまで行きました。そこから南に戻って——チャムスはこの辺です。ナイロビからかなり近いということがお分かりになるかと思いますが——いったんチャムスに入って、私のフィールド、住み込みができそうな地域を物色したりして回りました。そのあと、また北へ上がって、原子令三さんがやっていたガブラ（とソマリ）の地域に行って、エチオピア国境辺りまで足を伸ばしました。

それからまた少し南に下がって、マルサビットという、これは佐藤俊隊長がやっていたレンディーレという人たちのところに行って、その後、さらにもう少し南に下がりまして、鹿野さんがやっ

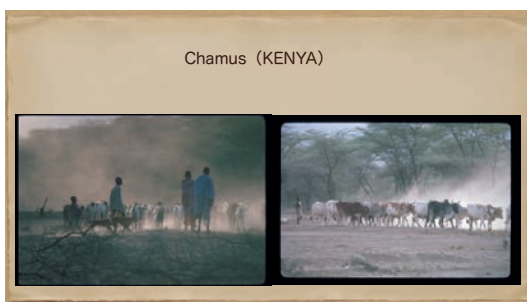


図 4



図 5

### Ⅲ 発表

てらしたパルサロイのサンプルという人たちのところに行ったあと、その近隣にあるナショナルパークで野生動物も見させていただいてナイロビに戻るという、18日間のとても素晴らしいサファリでした。

けれども、このサファリを通じて、北ケニアのサバンナや半砂漠という極限的な環境に生きる牧畜民を目の当たりにしまして、私としてはもともとそういったところに入りたかったので、半農半牧のチャムスが、なんというか……「中途半端」な対象のように思われて、少し気持ちが沈んだりもしていたのが当時の正直な気持ちでした。

チャムスランドの中で、私の調査地はどこがいいのかということは、既に前もって太田至さんと原子令三さんの2人が下見をしてくださっていました。

#### # 9

とても偉大な人類学者の原子さんなのですが、原子さんは、「君がこれからいっしょに暮らす人びとは、慎ましやかな、とても美しい人びとです」とチャムスを紹介してくださいました。とにかく人口6000というデータがありましたので、「滅びゆく人たちだよ」というようなこともおっしゃっていました。実際にはチャムスは滅びることはなくて、今もチャムスは健在ですので、滅びるというのは原子さんの見間違いだったのですが、それはともかく、原子さんのおっしゃったことは嘘でも何でもなくて、結局私はチャムスで調査を始めまして、続けることになりました。

サファリの後、どんなかたちでフィールドに入ったかということにも簡単に触れますと、佐藤隊長と2人でチャムスランドに入りまして、政府関係の省庁を回って挨拶をしたり、調査計画の説明をしたりして、フィールドでの居候先なども決まりました。佐藤さんは1泊だけいっしょにいてくださったのですが、その後「じゃあ、3カ月後に迎えに来るから」と言って去ってしまいまして、私は1人残されました。調査のノウハウも、生活の仕方も、人びととの付き合い方も、教えもトレーニングも全くなくて、それで先ほど「放り込まれ／放っとかれ型」と言ったのですが、その典型のようなものでした。

ただ、一つだけやるように言われたのは植物採集でした。これはとても有益でした。チャムスランドの植生を把握するだけでなく、植物を採集してきて標本を作るのですけれども、その過程で人びとから植物についてさまざまな話が聞けたわけです。例えば、植物を採ってくるとその名前（現地名）を聞いたりもするのですけれども、そのときに「これは儀礼に使う植物だ」ということにも人びとは触れ

てくれるのです。そうすると、「その儀礼って何？ どんなことをするの？」というように、さまざまな話を引き出すきっかけになりました。そういう意味で植物採集は、とりわけ調査の初期にはとても有効な調査方法の一つで、お勧めしたいと思います。

フィールドの選択こそ伊谷さんや佐藤さんに決められましたけれども、チャムスにおける人びととの関係構築、それから調査内容は、私自身が自分で決めて進めることになりました。その意味でこれもまた調査地の開拓だったのかもしれませんが。1986年、1988年にそれぞれ7カ月ずつ調査をした後、2年間のファンドをいただけることになりまして、合計3年以上、私はチャムスで調査を続けました。学位論文もチャムスで書きました。そして、これからお話ししますが、後にトゥルカナやドドスという人たちのところに入るのですけれども、その行き帰りにも先ほど地図でご覧いただいたようにチャムスはトゥルカナやドドスへ向かう通過点でもあるので、その行き帰りにチャムスに寄って、短期的な調査を今も続けています。

#### # 10

先ほどチャムスとドドスと言いましたけれども、その間にもうひとつ、トゥルカナというところにも少しだけ入っています。学位を取った後、2年ぶりにフィールド調査を再開し、チャムスにももちろん行ったのですが、トゥルカナにも新たなフィールドとして1994年と1995年、合わせて9カ月ほど入りました。

トゥルカナは1970年代に伊谷純一郎さん、太田至さんにより開拓された調査フィールドで、その後1986年に北村光二さんが加わって、人類学者以外にも社会心理学者や獣医学者といった人たちも参画して、学際的なチームで調査をしている一大フィールドでした。

#### # 11

トゥルカナはこんな感じのところですよ（図6）。ウガンダのドドスには後ほど入ることになるのですが、このタイミングで入らなかったのは、ウガンダの政情不安がありまして、ドドスの調査は絶望的だったからです。トゥルカナとドドスは言語的に近縁なので言葉を覚えるにはよかったですし、両者は国境を挟んで隣接していましたので、ドドスについてのさまざまな情報がトゥルカナに入ってくるということもありました。



図6

### Ⅲ 発表

#### # 12

結局、私は2回、合計9カ月の調査をしましたけれども、トゥルカナで調査を続けることはやめました。その最も大きな理由は、人びとに何を聞いても「それはオータが知っている」「オータに聞け」と言われてしまうのです。まともに相手にしてもらえないということがありました。他の人が既に長期で調査をしているフィールドに入るには特別な難しさがあるのだと思いました。

#### # 13

それで、最後のドドスの話になりますけれども、ドドスは私が自分で探して自分で決めて、1人であるというかたちで始めたフィールドです（図7）。これは文化人類学者の方々にとっては当たり前かもしれないのですが、生態人類ではむしろ珍しいかもしれません。京都大学の理学研究科の場合、霊長類学のフィールドはもちろんですが、人類学でも幾つかの先ほどご紹介したようなフィールド・ステーション——カラハリのブッシュマンやアフリカ中部の熱帯林といったフィールド・ステーションがあって、その中から選ぶ、あるいはリクルートされる、「ちょっと来ない？」みたいなかたちで誘われるのが案外ふつうだったような気がします。

#### # 14

チャムスをやってきたわけですが、なぜ新しいフィールドをという動機についても少しお話しします。チャムスに10年通って、多くの時間、チャムスだけを見てきました。チャムス以外のところに行きたいと思ったのはチャムスが嫌になったというのではなくて、比較研究の必要性を感じたということがあります。それでトゥルカナに行ってみたのですが、先ほど言ったとおり、うまくいかなかった。

比較研究の必要性をいちばんに感じたのは、「分かってしまう」感というものがあって、それに危機感を抱いたからです。「分かってしまう」感というのは、人びとの言動が何となく読めてしまうような感覚のことで、本当は分かっているかもしれないのに、「多分こういうことでしょう」「この人たちは次はこういうことするよね」ということが分かったような気になってしまうということで、しかも結構当たってしまったりもするのですが、そういうことが起きてくるようになった。それは危険だと



図7



思いました。

# 15

それでドドスに入ることにしたのですが、そのきっかけは、何冊かの民族誌が決め手となったのだと思います（図8）。まず、皆さんご存じかと思いますが、伊谷純一郎さんの『ゴリラとピグミーの森』<sup>1</sup>という名著があります。これを私は中学3年生の頃に読んだのですが、その後ずっと忘れていて、大学3年生の時に再読しました。素晴らしい本ですが、私がいちばん記憶に残っていたのは、タイトルにも掲げられているゴリラやピグミーのことよりも、伊谷さんが広域調査で訪れたウガンダ北東部の牧畜民のカラモジョンという人たちの描写です。いわく「固いマスクで、この人たちは心が通じないのではないか」という強烈な印象を伊谷さんは語っていらっしゃいます。

この他に東アフリカ、特にウガンダ北東部・カラモジャ地域の牧畜民の民族誌は何冊かあるのですが、決め手は『Warrior Herdsmen（遊牧の戦士たち）』<sup>2</sup>でした。ただし、これを含めて、これらの民族誌は全て1960年代までの調査の成果でした。

# 16

（スライドが）ちょっと細かくて申しわけありません、細か過ぎるところは見なくても結構なのですが、ウガンダの略歴です（図9）。ウガンダは1962年の独立後、1966年にオボテという人によるクーデターが起きて、その後、有名なイディ・アミンという国粋主義者のクーデターが続き、政治的・経済的に混乱しました。外国人は全て追放されて、国内の経済や政治がずたずたになってしまいました。その後1986年に現在のムセベニ政権になって、国が落ち着きを取り戻した後もカラモジャ地域は野放図にされていたこと、加えてアミンやオボテの敗残兵たちが武器を持ったまま北へ逃げたもので、その武器を食料に換えるかたちで牧畜民たちが銃を持つようになったという事情もあり、カラモジャは危険な地域のままとされていました。

<sup>1</sup> 伊谷純一郎『ゴリラとピグミーの森』岩波新書、1961。

<sup>2</sup> Thomas E. M. *Warrior Herdsmen*. Secker & Warburg, 1965. (トーマス, E. M.『遊牧の戦士たち』田中二郎・向井元子(共訳), 思索社, 1979)



図 8

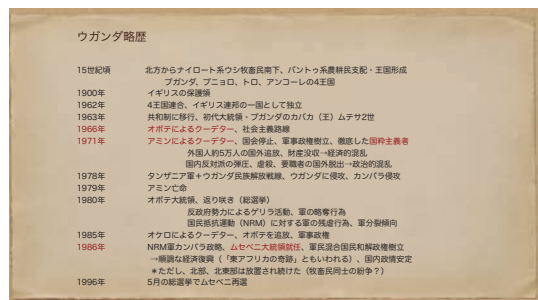


図 9

### Ⅲ 発表

#### # 17

カラモジャの予備調査は2回行ったのですけれども、そのような事情でしたので、はじめは調査がそもそも可能か、調査地に入ることができるのか、だいたいカラモジャ地域まで行けるのかという問題がありました。今とは違って、実際に行ってみるしか現地の状況を知る方法がありませんでした。国際シンポジウムなどでお会いした国内外の牧畜民研究者たちからとにかく異口同音に言われたのは、「行ってみて確かめるしかないだろう」「まだ駄目かもしれないけど、情報が無いのだから行って見て見るしかないだろう」というアドバイスでした。日本を出発する前、ある先輩には、「カラモジャを見てくる」と言う私に、「おまえ、死ぬで」とまで言われたりもしました。

#### # 18

そんなこともありましたが、決して無理はしないということに決めて、まずはウガンダの首都カンパラで情報収集をすることにしました。頼りになったのは教会、特にローマンカソリック教会です。たいへんな「辺境」の地にも教会があって、布教ってすごいなと思ったりもするのですけれども、まず教会、それから NGO です。奥地に拠点を持っていて、そこも行き来しているような団体も強いんです。それから、マケレレ大学につてがある日本人研究者の先生からも紹介状を書いてもらったり、マケレレ大学から今度は大統領府を紹介してもらおうといったかたちで情報を集める計画を立てました。

#### # 19

1996年の予備調査は、カラモジャ地域における調査の可能性を確かめることを目的としたのですが、ケニアの首都ナイロビを出て、ウガンダの首都カンパラに入り、ウガンダ北東部のカラモジャ地域を回って、カンパラ、ナイロビへ戻るといふ、これも3週間ほどかけましたけれども、全部で4000kmほどを1人で運転して回りました。

#### # 20

これも細かいので、すみません、細かいところは見ていただかなくても大丈夫ですけれども（図10）、ナイロビからの道程を示した地図です。ナイロビから国境を越えて、ウガンダに入り、首都のカンパラ



図 10

から北へ向かって、この辺りがカラモジャ地域なのですけれども、こちらへ行って、帰りは別のルートを通ってまたカンバラに戻って、ナイロビに帰る。こうしたルートで広域調査をしました。

ナイロビからカンバラに行って——カンバラに着くまでも3日ほどかかるのですけれども——まずはカンバラでいろいろな情報を集めることになっていました。カンバラに着いた翌日にマケレレ大学に行き、マケレレ大学の先生の紹介で大統領府にカラモジャ担当大臣を訊ねて行ったところ、オフィスで秘書官の方から、カラモジャ担当大臣であるデイビッド・プルコール氏が、「たった今、出かけた。まだ間に合うかもしれないから急いで追いかけてください」と言われたのです。

急いで走って追いかけたところ、彼は地方都市のミーティングに参加してそのままカラモジャに行くことになっていて、そのためにまさに車に向かっていたところだったのです。その大臣を何とか捕まえて、立ち話でしたけれども、とにかく事情を説明しました。大臣は快くこちらの話を聞いてくれて、ソロチというカラモジャに行く途中の町があるのですけれども、「これからソロチに行ってミーティングがあるんだ。君は明日ソロチに来られるか。車を持っているのだったら好都合だ。ソロチで落ち合おう。その後いっしょにカラモジャに行こう」と言ってくれたのです。

事態は急展開しました。ソロチまでは385kmほどなのですけれども、朝出れば夕方には着きますので、すぐに車の準備をして、翌朝ソロチに向かいました。ソロチでプルコール大臣と無事落ち合いました。その翌日に今度はカラモジャに向けて出発しようとしたのですけれども、大臣の奥様の到着が遅れるなどして日が暮れてしまったので、出発は明日になるだろうと思っていたところ、夜の9時にこれから出発するということになりました。大臣の車はラジオコールなども付いていて、銃を持った護衛の兵士たちも乗り込んだのですけれども、とにかくその車に付いていくしかありませんでした。月もない夜で、真っ暗な中、深い砂道を含むダートな道を走りに走りました。そして翌朝の午前3時すぎにカラモジャの中心地であるモロトという町に着きました。

そのような非常にラッキーでしかもハードなサファリになったのですけれども、カラモジャの中心地のモロトに着いた後、私のフィールドとなるドドスの地はそこから北へ100kmほど行ったスーダンとケニアとの三国国境のあたりなのですけれども、そこを3日間ほど見て回ることができました。人びとは思ったよりずっと落ち着いていて、調査は可能と判断しました。

帰りは行きのソロチルートとは別のルートを通って帰ってきたのですけれども、これはカラモジャの

---

### Ⅲ 発表

中心というか、人びとがたくさん住んでいる地域ではあるのですけれども、ひどい悪路で、車が壊れました。スプリングを折るのはよくあることなのですけれども、このときはそれだけではなくてショックアブソーバーまで引きちぎってしまったり、ブレーキパイプを傷つけてしまったり、そのせいでオイルリザーバーもほとんど空になってしまったり、とにかく大変な目に遭ったのですけれども、何とかカンパラまで帰り着きました。そして車を直すのに1週間ぐらいかかりましたけれども、無事にはないかもしれないのですが、何とかナイロビに帰還しました。

#### # 21

こちら(図11)、左上は少し暗いですがマケレレ大学で、左下がカラモジャ担当大臣のブルコールさんです。カラモジャへの道は右上のような感じの道なのですけれども、こういったところをサファリしました。

#### # 23

日本を出るときにはカラモジャまで行けるとは思っていませんでした。カンパラで情報収集をして、カラモジャ行きはまた出直せばいいと考えていました。その意味では、カラモジャに入れただけでなく、最終目的の最北端のドドスの地まで行けたのですから大成功過ぎる旅となりました。

#### # 22

この後、1988年にもう一度カラモジャの広域調査をして、その後にドドスのフィールドに入ることになりました。ですから、ドドスのフィールドは、10年間思いを温め続けて、3年かけて予備調査をして、広域調査を繰り返した後にようやく入れたフィールドだったということがいえると思います。

#### # 23

ドドスのフィールド探しの旅は、先ほど言いましたように夜中の車の運転や、車が破壊的に壊れるなど大変なサファリでした。たった1人でケニアからウガンダに陸路で入って4000kmを走った過酷なサファリだったのですが(図12)、広域調査ではいろいろなものを見ることができ、その末に納得したか



図 11



図 12

たちで調査地を選び、入ることもできるのではないかと思います。もちろんものすごく大変な思いをしましたし、ひょっとしたら命の危険もあったかと思えます。それでも、あんなに毎日フル回転で、終日充実した密度の濃い日々はなかったのではないかと。無謀なことをするのは慎むべきですから同じことを若い人たちがするのは決していいとは思いませんけれども、私の調査地探しの経験が何らかの勇気を与えるものであったならと思います。以上です。すみません、時間オーバーしました。

(中川) ありがとうございます。広域調査の話は、基本的に霊長類の方でも、どうやって調査地を見つけるかということも、今回話していただいた半沢さんや松田さんは、それぞれなぜそこに行ったかというご説明があったように、広域調査を経て決めたわけではありません。他の情報から決められたわけですが、霊長類学の方も、なかなか河合さんのような激しいものはないのですが、広域調査をして決めていくという方もいらっしゃるということを補足しておきます。

## 質疑応答

(中川) それでは、ただ今の中堅以上のお二人のご発表につきまして質疑をお願いいたします。ここは若い人優先ということにしませんので、シニア・中堅以上の方もどうぞ遠慮なくご発言ください。では、お願いします。いかがですか。もちろん若い方も構いません。シニア優先というわけではないので。はい、曾我さん。

(曾我) 弘前大学の曾我です。ご発表ありがとうございます。お二人に質問です。松田さんも河合さんも、最初のフィールドは先生に連れて行ってもらったという感じでしたが、二つ目のフィールドに入るときには、戦略的にフィールドを選んでおられるように感じました。一方で、半沢さんと今城さんのケースですが、半沢さんの場合は、自分でその場所に決めたというよりは中川さんが場所を選んで連れて行ったように思えました。今城さんの場合は、いろいろな本などに導かれながら場所を選んでいったのかなと感じました。

フィールドを開拓するということに、これまでの研究との関連において、戦略的に選ぶことと、先生や書物に導かれて行くことの違いをどうお考えになるか、松田さん、河合さんに、それぞれにお尋ねしたいと思います。

(中川) では、松田さんの方から、いかがでしょうか。

(松田) 戦略的に選ぶかどうかですよね。学生当時は戦略的に調査地を選ぶというような気持ちは全く無かったです。今になって思えば、戦略的に長期調査がすでにされている所に行くというのは、ある意味楽は楽ですね。ウガンダはそういう長期調査がされている所に僕が、お客さんではないですけども気軽に行って調査していたので、あまり余計なことは考えなくていいというか、行って向こうで車もすぐ手配されるし、調査地に着いたらすぐ調査できる。そういう意味では、本当に研究だけをしたい人やコミュニケーションが苦手な人などに見たら、ある意味確立されているところでやるのはすごくや

---

りやすいと感じる人もいるかもしれません。

一方、僕の場合は、そういうところは窮屈に感じるというか、好きなことをやりたいし、自分が好きなものを見たいし、好きなものを観察したい、研究したいというところがあるので、そういう環境だと少し窮屈だなと感じます。やはり戦略的に研究が楽にできる場所を選ぶよりは、自分で開拓した調査地の方が好き勝手というか、何でも自由に自分でできるということで、気楽でいいと感じています。

(曾我) そうすると、自分の問題として新しいフィールドを選んだのであって、研究上の理由で戦略的に選んだわけではないという理解でよろしいでしょうか。

(松田) そうですね。僕の場合は調査地を変えないといけなし、対象も変えないといけなかったので、どうするかというときに、せっかくだったら誰もやっていない所でやりたいというのがあったので、戦略云々というよりは、これは個人的にその方が好きだったということだと思います。

(河合) 私は今、曾我さんの質問の意図を勘違いしていたのですけれども、戦略的というのは研究上の戦略という意味だったのですね。それだったら、私は研究上の戦略といえるのかどうか分かりませんが、最初に紹介しましたように、生態人類学をやろうと思っていたということもあって、なるべく自然に強く依存して極限的な環境で生きている人たちのところを見たいという気持ちが最初からあって、半農半牧のチャムスで10年調査しましたし、それはそれで非常に面白いことはたくさんあったのですけれども、ウシやヤギ・ヒツジといった家畜を頼りに生きているような生業活動を中心とする研究はついぞできなかったということはあります。それがあったので、なるべく極限的な環境で、あるいは家畜に強く依存して生きている人たちのところを見たいということがありました。それを研究上の戦略というのであれば、そういうことだと思います。

(中川) 総合討論的なご質問で、ありがとうございます。曾我さんに、誤解を招くといけなしで半沢との関係について少しだけ補足しておきますと、私自身、パタスモンキーを前にやっていたので、もう一度どこかで再開したいとは思っていたのですけれども、なかなかいろいろ思い切りがつかなくて

---

### Ⅲ 発表

中、半沢さんが入ってきました。最初はサバンナ志向というのは聞いていただいて分かったと思うのですが、けれども、ヒビでもやるのかなと実は僕は思っていたのです。けれども、いろいろ聞いてみたら、「パタスをやりたい」と言うから、「じゃあ、一緒にやろうか」という形で、私が連れて行ったのでもなく、一緒に開拓したという表現が正しいと思います。

(曾我) 中川さんは、これまでパタスモンキーの研究をやってこられたわけですが、新たな場所に行くときには、前の地域とは違う理由が何かあったのでしょうか。

(中川) そうですね。実は先ほど半沢さんの方から紹介があったとおり、広い意味ではサバンナなのですが、いわゆる東アフリカというミオンボ林なのです。ジャケツイバラ亜科が優占するようなウッドランドサバンナです。前の所はアカシアサバンナで、だいぶ植生が違う所です。ただ、それは恥ずかしながら結果的にそうだったということで、最初はモレも似たような環境だろうと思っていたのです。ただ、その中で私自身は、前の所でやり残したことがあったので、前の所はそれこそいろいろ危険があって入れないので、それを今度の新しい調査地でやってみたいということでした。ただ、結果的によく調べてみるとそういう植生の違いもあって、比較もしやすくなったというのが正直なところです。少し立ち入った話になりましたが、他はいかがでしょうか。森光さん、どうぞ。

(森光) 兵庫県立大学の森光と申します。フィールドを開拓するに当たって、もちろん霊長類学だとサル、人類学ではヒトへの探究心や研究者の強い熱意によって行われると思います。観察を続けることが重要であることは理解しているのですが、共通して何って面白いと思ったのは、コミュニティ、要するにその地域の人に溶け込んで、そこでまたその基盤を活用して開拓を進めているなというのがイメージとしてありました。

要するに、私も農業被害に遭っているサルの研究をしている中で、コミュニティに入ってやらないとできなくて、それは逆に言うと人の付き合いを非常に大切にやってきた経緯があります。あえてここで聞きたいのは、本当に外国人で言葉も通じないなかなか大変な環境の中で、どういうコミュニケーション能力が必要なのかということ、松田さんや河合さんも含めて、若い方も含めて、もし何か

---



ヒントがあれば教えてほしいと思って質問しました。お願いします。

(中川) 松田さん、いかがでしょうか。

(松田) 言葉が通じない所でどうやって暮らしていくかということですよ。気合しかないと思いますけれども、それを言ったら……。でも、何となく通じるものですよ。指を差したりして何とかいろいろ通じるので、そういうものを繰り返してだんだん言葉を覚えていくと思うのですけれども、逆によく通じないからこそ仲良くなれるというか、きっかけにはなるので、そういうところを通して少しずつ仲良くなる。あとは語学なので、本当にしゃべって行って学ぶしかないというところですよ。幸いマレー語はそんなに難しい言葉ではなかったもので、割と簡単に覚えることができましたけれども。

(中川) 最初は英語でやられていて、その後マレー語にということで、マレー語で話すようになるともう少し深いところまでつなげられるという感覚はあるものなのですか。

(松田) マレー語の方がいいなと思ったのは、現地のアシスタントを雇用するときに、英語をしゃべれる人はやはり向上心が強いので、あの手この手でお金を要求してくるので毎月支払う謝礼も随分高いですね。ちゃんと仕事をしてくれればそれでもいいのですが、そうでもない。マレー語しか話せないローカルの方が誠実に働いてくれることがわかり、きちんとマレー語を覚えて、言いたいことをきちんと伝えないと調査ができないなと思って、それで覚えました。だから、いろいろなことでたまされたりする経験がある中で、やはりマレー語を学ばなければ駄目だなということで、調査地に入って2、3年目ぐらいからマレー語を勉強するようになりました。

(河合) コミュニケーションの取り方ということですよ。言葉ができればそれはそれでとてもよいのですけれども、それだけでは人との付き合いは決してうまくいかないということもあると思います。特に、先ほどの伊谷さんの『ゴリラとピグミーの森』で、「カラモジャの牧畜民たちはマスクが固過ぎる、心が通じそうにない」というような記述があって、私にはそれがとても印象に残っていました。いまだ

---

### Ⅲ 発表

に、われわれ日本人もたくさん牧畜民の調査に入っているのですけれども、たとえば先ほどご紹介したトゥルカナの人たちは、とにかくコミュニケーションの取り方、あるいはインタラクションのありかたそのものが研究テーマになるような、そうしたやりとりの仕方が何もかもが違うというような人びとの中に入るという側面が人類学の場合にはあると思います。

ですから、決して彼らと同じようにできるようにはならないということがあり得ます。同じようにはならない、できないけれども、伊谷さんがご自身のトゥルカナの民族誌に「ぎくしゃくとした関係のまま、私たちはずっと共に時間を過ごしてきた」というような感想を書いていらっしゃるのですけれども、やはりそういうところがどこまで行ってもあると思いますし、それ自体が人類学の非常に重要な課題なのではないかと考えています。

(中川) 若い方、半沢さん、何か補足することはありますか。今城さんは何か補足することはございますか。

(半沢、今城) 特にないと思います。

(中川) ありがとうございます。森光さん、よろしいですか。ありがとうございます。

他にはいかがでしょうか。オンラインの方もよろしいですか。

それでは、時間も少し押しているようですので、ここは休憩を挟まずにコメンテーターの方のご発表に移っていきたいと思います。

それでは、お一人目は霊長類の方なのですが、竹ノ下祐二さん、中部学院大学看護リハビリテーション学部です。ご発表の中にあると思いますけれども、竹ノ下さんは今、ガボンのムカラバという所の、ゴリラを中心とした、チンパンジーもいるので大型類人猿というふうになっていますが、そこでのチームリーダーでいらっちゃって、実は竹ノ下さんがこのフィールドを開拓されたということで、開拓者でもある方です。準備はよろしいですか。

---

## IV コメント

## コメント1：ガボン・ムカラバにおける大型類人猿の長期継続調査

竹ノ下 祐二

中部学院大学看護リハビリテーション学部

皆さんのお話を伺っていて話したいことが山ほど出てきたのですが、いかんせん趣旨説明よりコメントの時間が短いものですから、無駄話をせずに進めたいと思います。

今ご紹介いただいたように、私も今自分がやっているフィールドを始めた人間なのですが、なかなか感慨深いものがあります。というのは、2006年に霊長類研究所で行われた共同利用研究会で新しい調査地の一つとして発表したことを思い出して、いつの間にか長期調査地になったのだということがあります。

## # 2

今日、中川さんから頂いたリクエストはこういうことです。開拓した後、長期継続調査だからこそ見えてくることや、逆に長期継続調査することの難しさ、解決せねばならない問題についてお話ししてくださいと言われたのですが、正直それを話すと愚痴と人の悪口以外に出てこないもので、ちょっと困ってしまったのですが、そういったことは実は以前、読み物として書いたものがあります。椎野若菜さんが編集された「100万人のフィールドワーカーシリーズ」の中で、開拓してから長期調査地になっていく過程でどういう問題が出てくるかということを書いています<sup>1</sup>。

<sup>1</sup> 竹ノ下祐二「森の水先案内人：大型類人猿調査と「トラッカー」『フィールドに入る（100万人のフィールドワーカーシリーズ）』椎野若菜、白石壮一郎（編）古今書院、pp. 52-67, 2014.



#### Ⅳ コメント

それを繰り返しても仕方がないというか、それを話していると長いので、今日はポイントを絞ってお話したいと思います。開拓した新しい調査地はどのようにして長期調査地になっていくのか、開拓したフィールドはどのように育っていくのかということをお話したいと思います。その前段階としてフィールドについて若干紹介しておかなくてはなりません。

##### # 3-5

ムカラバ・ドッドゥ国立公園という所で調査をしています(図1)、ご覧のようにアフリカのど真ん中にあります。拡大していくと、首都のリーブルビルから車で10時間ぐらいかけて地方都市のチバンガに行って、1泊してそこから3時間ぐらい未舗装の道路を走って調査地に着きます。どういう所かという、熱帯林とサバンナがモザイク状になっている所で、今はカウンターパートの研究機関のリサーチステーション、これはJICAの援助で建てたものですが、そこをベースとして、この辺りで類人猿の調査をしています。こういうサバンナと森がモザイク状になっている所です。少しだけ動画をお見せしたいと思います。

##### —動画開始—

こんなふうにして、森の中でゴリラも人付けができていまして、生まれて数カ月の赤ん坊を持ったメスが木の上で採食をしている場面です(写真1)。

それからサバンナの方は、これは今、森から出てきてサバンナを渡ろうというところですけども、群れのシルバーバックがあまり慣れていないので、チャージしてきて、どうしても下がってしまうのですけれども、そうしたら手前の方にいた若いオス、これは生まれたときから人付けされて群れで育ったやつが大丈夫といって横やりを入れるという場面です(写真2)。

こんなふうにして行列を作って、詳しいことはお話ししませんけれども、シルバーバックだけがあまり慣れていなくて、メスやコドモたちは気にせず、「さあ、渡ろうぜ」と言って渡るので、しょうがなく渡るのです。こんな感じで、だいぶ苦労はしましたけれども、今はかなり十全に観察ができる状況です。

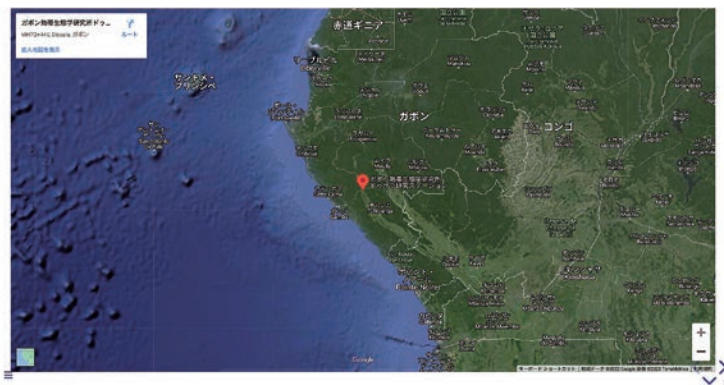


図1

—動画終了—

## # 6

さて、開拓の話をしただけさせてください。開拓したと言っているのですけれども、実は私が始めたと言っているのかどうかというのは結構微妙なところがあります。というのは、国際的にはムカラバにゴリラ、チンパンジーが高密度に分布して生息しているということは1980年代から分かっていました<sup>2</sup>。ただ、あまりにアクセスが悪いために誰もやっていなかったという所なのです。

それが1990年代に、エボラがコンゴ、ガボンで出まして、多くの生息地で類人猿の個体数が減ることがあったのですが、人里から離れてアクセスが悪いためにムカラバは減らなかったということが、1998年に行われた調査で分かっています<sup>3</sup>。それと同時に、中部アフリカでゴリラとチンパンジーが同所的に生息している地域で、幾つも調査地が立ち上がってきていて、恐らく私が手を付けなかったら、その1年、2年の間に誰か他の人がやっていたであろうということで、探して見つけたという感じではないのです。

## # 7

それから、個人的にも実はこれが4カ所目の調査地です。1994年に中央アフリカに行きまして、黒田末寿さんに連れて行っていただきましたが、このとき僕は森の中で過呼吸を起こして倒れてしまいました。

それから1995年、1996年は、ンドキという所で、これは西原智昭さんに連れて行ってもらいましたが、その後コンゴが政情不安で続けられなくなりました。

そうしたら今度は鈴木滋さんが声をかけてくれて、山極壽一さんの引き継ぎをして「ガボンのプチロアングという所で調査をするけれども一緒に来るか」と言ってくれて、やったのです。最終的にここで

<sup>2</sup> Tutin C. EG., Fernandez M. Nationwide census of gorilla (*Gorilla g. gorilla*) and chimpanzee (*Pan t. troglodytes*) populations in Gabon. *American Journal of Primatology*, 6: 313-336, 1984.

<sup>3</sup> Walsh P. D., Abernethy K. A., Bermejo M., Beyers R., De Wachter P, *et al.* Catastrophic ape decline in western equatorial Africa. *Nature*, 422: 611-614, 2003.

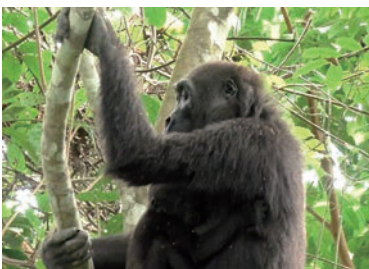


写真 1



写真 2

#### IV コメント

の研究で学位を取るのですが、まあ観察できないということで、この先どうしようかと悩んでいました。これを出したのは、先ほど曽我さんの話にありましたけれども、私も人に連れて行ってもらっていたということです。

#### # 8

ここから長期調査の話を少しします。1999年に始めるのですけれども、便宜的にそこから現在までを三つの時期に分けたいと思います。

#### # 9

まず1999年から2005年ですが、1999年4月に予備調査に行きました。山極さんから「ちょっと新しい調査地を開拓してきよ」と言われて、「ああ、そうですか。どうしたらいいのかわからないけど行ってきます」と言って、現地に行って1週間ゴリラを見まくって帰ってきました。それで「ムカラバでやりましょう」と言ったら、今度は山極さんが「よし、じゃあ協定を結ぼう。ちょっと協定を結んできてくれ。これが動物学教室のひな型だ」と言って渡されて、今みたいにネットもない時代でしたので、その紙を持って行って向こうでサインしてもらいました。それから「長期調査地の宣言をしてこい」と言われたので、雨量計を持って行って、村の真ん中にどーんと置いて、「これからわれわれは長期調査をする。その証として気象観測を始める」と宣言したり、そんなことをやっていました。

そういう何もない状態から始めて、キャンプ地を定めて、それから家を建てました。家は濱田穰さんが設計図を描いて、岡安直比さんが基礎を造って、僕が窓と屋根を造るという感じで家を建てて、基礎調査や密度調査などをしながらだんだんインフラを整えていきました<sup>4</sup>。

2002年から安藤智恵子さんを導入してゴリラの人付けを開始します。これが第一期、本当にこれから始めるぞという時期です。

---

<sup>4</sup> 竹ノ下祐二「ガボン・ムカラバ保護区の類人猿」『モンキー』45：21-26, 2001.

---

## # 10

2006年ごろにおおむね人付けが完了したところで、環境省の大きなお金でプロジェクトを始めます。このときに、ガボン人研究者に初めて調査に参加してもらって、人付けができたゴリラを研究して、大学院生の岩田有史さんが学位論文のための研究をしました。

それから、大型類人猿以外の霊長類の調査も始めまして、本郷峻さんがマンドリルの研究で後に学位を取ります。これは2008年までで終わるのですが、2009年から2014年まで5年間、JICAとJSTのSATREPS（地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム）というすごく大規模な調査プロジェクトを行いました。総合的な動物調査をし、ゴリラツーリズムの開発研究をし、保全のための実践的な研究をし、ガボン人研究者が日本に留学して3人学位を取り、ガボンのマスク大学で3人学位を取りました。日本人研究者も何人も学位を取りました。

このプロジェクトのために作るはずだったリサーチステーションは、JICAの事業の常で、終わってから2015年に完成し、フィールドの運営主体を日本人主体からガボン人主体に移行したという状況です。ここまでが第二期です。

## # 11

2015年以降が第三期で、金の切れ目が縁の切れ目で、第二期に関わった人の多くはすつとどこかに行ってしまうのですが、残った者たちではそばそと調査を続けながら今に至ります。コロナ禍で中断しましたが、去年調査を再開しました。

## # 12

ここからがコメントです。ここで三つの時期を分けて考えていきたいのですが、左が2000年の簡易キャンプです。それが2008年には右上のような定住キャンプになり、2014年には右下のような立派な建物が建ちます（写真3）。こういうものを見ると、どんどん発展して拡大していくイメージがあると思うのですが、多分そういうことではないのだろうと思うのです。



写真3

#### IV コメント

##### # 13

ソフトウェア開発に関係する本<sup>5</sup>で読んだのですけれども、ソフトウェアやシステム開発では3種類のシステムがある。開発段階に応じて第一のシステムから第二のシステム、第三のシステムへと移行していくものであって、この順序は変えることができないし、どれかをスキップすることができないとそうです。

##### # 14

第一のシステムとはどういうものかという、もう追い詰められてやらなければいけないという必要性に迫られてやるものです。追い詰められてやるので、正しくやる時間がないので、適当にやる、重要なところだけやる。結構高揚感の中で進めていく。けれども、これが成功すると今度は、その出来上がったシステムが多くの人々の想像力を刺激して、第二のシステムを生んでいく。たとえとしては、多分こんなものを覚えている人はもういないと思うのですけれども、Mosaic というウェブブラウザが1990年代にありましたが、非常に簡易的なものでした。

##### # 15

第二のシステムは、第一のシステムに刺激を受けた多くの専門家が参入してくる。そして、誰もがそのプロジェクトは自分のものだと言う。そして、第一のシステムで正しくやっていなかったことを正しくやろうと言う。そして、いろいろな意思決定は多人数からなる委員会で設計する。多機能化が進んでいって機能満載になるけれども、動作はもそもそする。皮肉なことに、最悪なシステムであるにもかかわらず市場に一番君臨する。例としては Internet Explorer や Windows 97 などそういうものではないかと思います。

##### # 16

第三のシステムは、第二のシステムでやけどをした人がつくる。第一のシステムの軽快さと第二のシ

---

<sup>5</sup>Gancarz, M. (著), 芳尾桂 (訳) 『UNIX という考え方：その設計思想と哲学』 オーム社, 2001.

---



システムの機能性を組み合わせたもので、これがベストだということです。

## # 17

この話をフィールドの歴史に当てはめてみたときに、かなり共通点があると思いました。つまり、開拓期は少人数でフィールドの運営も顔を見知った数人でやっていたし、いろいろな調査も便宜的な手法を多用していたし、ゴリラの人付けは経験知もない人がぶっつけで、手探りでやっていった。それで、ゴリラが人付けできたところでプロジェクトが拡大して、大きなお金を取って、たくさんの専門家が入ってきて、精密な研究手法を使って、新しい技術も取り入れて、その結果、多くの研究成果と高い外部評価を受けた。これは中川さんが趣旨説明の中で紹介していた、五百部さんのいう中小企業型（町工場型）みたいなものだと思います。

ところが、こういうプロジェクトはお金の切れ目があるので、その後これに参加した人はまたどこか別のところの巨大プロジェクトに移っていくわけです。そして残った私たち数人が再び少人数で地道にじっくりと研究をしていく。また開拓期のような家族的な運営をしつつ、一方でこれまでの研究成果に基づいて新しい研究をしていく。今、科研費は京大の田村大也さんを代表として出しているのですが、ムカラバでできること、ムカラバから出てくるゴリラ研究を目指そうということをやっています。

## # 18

まとめます。長期調査地だから見えてくることということで、幾つかコメントをして終わりたいと思います。まず、「開拓って何だろう」ということを僕も思いました。誰も行ったことのない所に行くだけで開拓になるのかというと、うーんと思ったわけです。だから、それはただの短期調査かもしれないし、広域調査かもしれないのですが、長く続けていると初期にやっていたことが「開拓」だと位置付けられるのだということです。だから、最初から開拓しようなどと考える必要はなく、とにかく何か面白そうな所や既存の所ではできないことがあったら、ぼーんち行ってしまえばいい。そしてそのときに、ちゃんと正しくやろうなどと考える必要はなく、俊敏に軽快にやっていく。だから楽しいわけです。何でもありなので。

その後、それで調査地が軌道に乗ったときに、拡大していくことを良い状態と考えては多分いけなく

---

#### IV コメント

て、到達点は第三のシステムである。五百部さんの言葉を借りれば、家族経営型（町工場型）でしたか、そういうものに入ったん拡大したものが落ち着くわけです。そうすると、実は拡大しているときに喜ぶべきではなくて、拡大しているときに、その期間をいかに短縮して、早く第三の安定した軽快で多機能なシステム、小回りが利いてそこでしかできない研究ができるようにしていくかというのが、これから先、フィールドを開拓した人が目指すべき方向性ではないかということ、二十数年間やってきて思っています。

# 19-20

確信犯的に時間を超過しましたがけれども、ここまでで終わります。

(中川) 私が割と気楽に書いたということで、お二人目としての批判といいますか、開拓とは何かというところもきちんと定義しないといけなかったと反省しています。

私からもお伺いしたいことがあるのですが、その前に、最初に出しましたとおり、京都大学の生態人類学の方から田中二郎さんが、1967年でしたか、開拓されて、そこを引き継いでおられる高田明さんにコメントを頂きます。

## コメント2：ボツワナ・ハンシー地区におけるガイ／ガナの長期継続調査

高田 明

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

## # 1 (図1)

ありがとうございます。京大 ASAFAS の高田です。竹ノ下さんのように整った発表準備をしていないので、スライドショーのような感じになってしまいますが、10 分間の時間でやりたいと思います。

## # 2 (図2)

何度か中川さんと河合さんのところでも言及された、田中二郎さんが開始したボツワナのフィールドに私は今も関わっております。最初は 1966 年、田中二郎さんが当時の大洋漁業（後のマルハ）のクジラ捕りの船に乗って、2 週間かけてたどり着いた南部アフリカで、ポンコツの車に乗りながらたどり着いた村というのがこういう光景だったと聞いております。このぐらいのときからずっと、もう数世代にわたって関わりを続けているフィールドということになると思います。

とはいえ、サンは移動する遊動民ですから、人もいろいろと移動しながら、そして調査者のわれわれも移動しながらの関わりというイメージを持っています。1960 年代ですから、まだ革のふんどしなどを着ているような状態から調査は始まっています。この時代の調査が、有名な『Kalahari Hunter-Gatherers』という Lee & DeVore の本に田中先生の論文が収録されたり、日本語で『最後の狩猟採集民』という本が出たりという成果になっています。

## # 3 (図3)

私自身がフィールドに入ったのは、そこからずっと丸ひと世代遅れて 1997 年です。これは左側が僕で、右側が僕の先輩、悪友でもある秋山裕之さんです。第一世代の探検カルチャーの後を引き継いで、ちゃんと山岳部仕様のテントを持ちつつ、まだ当時は新しかった京セラ製のソーラーランタンを一生懸命組み立てていて、「秋山さん、こんなんではんまに電気つくんですかね」「あ、ついた、すごいなあ」



図 1

#### IV コメント

などと言っていたのを覚えています。こんな感じで、長期フィールドとはいいましてもカラハリのチームは個々がそれぞれ自分のテーマを持って付いたり離れたりしながら、時折こういう感じの徒弟システムのような学びが生じる調査だったように、振り返ると思います。

このときも確か、この後にすでにこのシンポジウムでも何度かお名前が出てきた菅原さんや大崎雅一さんという先輩研究者がフィールドにいらっしゃりました。秋山さんと相談しながら、「菅原さんはご飯は軟らかめがいいで。大崎さんは固めや」「それやったら2回作らないといけないじゃないですか。じゃあ、二郎さんはどうなんですか」と言ったら、「二郎さんは大丈夫。どっちでもおいしいって言う」とか、そんな話をしていたのを覚えています。

#### # 4 (図4)

いろいろな専門家がいた学際的な調査隊で調査を進めていくのは結構大変です。こちらは東京外大の天才言語学者として知られている中川裕さんですが、私自身は実は最初、この中川さんとそのパートナーでもある大野さんにフィールドに連れて行ってもらいました。僕は人類学に転身する前には子どもの言語習得についての研究や発達相談をやっていたので、サンでも子どもの言葉やコミュニケーションの研究をやりたいと意気込んでいました。フィールドに着いたら中川さんがいそいそと「じゃあ、ちょっと子どもの言葉を聞いてみるね」と言って、ケレツォという当時4、5歳だった子どもに話していると、みるみるうちに構音の構造を明らかにしていって、かつ「この子にはこういう組織的なゆがみがあるね」ということをだーっと書き続けていって、「すごい、すご過ぎる」と思ったことも強く覚えています。

また、インフォーマントの人たちに、「もっと昔はどんなだったんですか」と聞くと、先ほど河合さんが言われていたように、「それは田中二郎に聞いたらいいね」といった回答が返ってくることもありました。何もできない私はどうしたらいいのでしょうかという状態だったというのが最初のフィールドワークです。

この最初のフィールドワークは、僕自身はもちろんすごく記憶が残っているのですが、実は歴史的なサンの状況とも深く結び付いています。ちょうどセントラル・ゲーム・リザーブという動物保護区からサンがボツワナ政府の方針によって再定住させられた年なのです。その再定住のさなかに、秋山

「最後の狩猟採集民」(1967年)



(C)田中二郎

図 2

見よう見まねで調査開始(1997年)



図 3

さんはもう1年間のフィールドをやっていたのですが、私はこれから1年間入れと田中二郎さんに言われて行ったわけです。ところが、再定住が政治問題化してきわめて調査がしにくくなりました。また、一つ前のスライドでも写っていた車の調子が悪くてその対応にも追われていました。調査許可が下りず、その交渉をするために、また車の修理をするためにも、このフィールドから首都のハボローネまで700kmの道のりを3回か4回往復しました。車が途中で止まってしまったりして移動に何日もかかったのを覚えています。そんなことをやりながら、ビザを1カ月だけ延ばしてもらったのですが、それ以上は「もう駄目だ、帰れ」と言われて結局1年間の予定を4ヶ月間に短縮してボツワナから引き返したというのが、僕の最初のフィールドワークの苦い思い出です。

#### # 5 (図5)

僕はナミビアでのフィールドの新規開拓もしたということで、今日は両方の視点からの話しをして欲しいということでした。じつは、ナミビアに行ったことには上の事情が関わっています。ボツワナで調査ができない、しかも政治状況が関わっているからずっとできないかもしれないと言われてまして、ボツワナから帰国した翌年「ナミビアに行こう」ということになりました。最初は田中二郎さんが同行してくれたのですが、途中で帰国されたので、道半ばから一人でのフィールド探しとなりました。

その過程で、前の年に見たボツワナとは全然違うサンの姿を目にしました。これはオバンボという近隣の首都の農牧民の村で、サンの人たちが組織されて、収穫されたトウジンビエの脱粒をしているところで、「こんな光景、ボツワナでは全然見たことがないわ」と思ったのを覚えています。前年の経験があったおかげで、見るもの、聞くものが面白く感じるわけです。これはやはりサン研究を広げないといけないということをまだまだ未熟ながらも思いまして、そこからナミビアの調査地を自分で開拓していくという流れになりました。

#### # 6 (図6)

幸いその後、もう1年ぐらいたった後にボツワナの調査許可も下りまして、半ば偶然なのですが、ナミビアとボツワナというフィールドにどちらも5年ずつぐらい長期滞在をするという、後で考えれば幸運に恵まれました。



図 4



図 5

#### IV コメント

その過程でいろいろ学びました。例えばボツワナのフィールドでは、やはり組織で研究を行っているとたくさんの方の専門家が、必ずしも分業してはいたわけではないのですが、さまざまに補い合う知識を積み重ねています。これは田中二郎さんと菅原さんの編で、私を含むボツワナでのサン研究者がコントリビュートした「Encyclopedia」(百科事典)です。これは多分ブッシュマン研究の長い歴史の中でも最も正確で整ったものの一つではないかと自負しております。

それから、サンの調査は人や社会の調査ですから、現地のカウンターパートとの協働をもちろん最初の頃から行っていました。とはいえ、日本人チームでやっていると気心の知れた日本人調査者との関わりに重きがおかれがちです。これに対してナミビアでの調査から1人で動くことの楽しさを知った後は、国際的な研究者のネットワークが広がりました。上の方の私が両手に花でにやけている写真に写っているのは、ボツワナ大学のマイツェオ・ボラネさんという方とエウレカ・モキベロさんという研究者です。彼女たちとは一緒にフィールドに行き、ボツワナ社会の事情を聞きながら調査をしました。下の写真は、当時ケープタウン大学に勤めていたドイツ人の言語学者マティアス・ブレンジンガーさんとその同僚で今は SOAS に勤めているあるシーナ・シャーさんという方で、やはり一緒に調査をしました。

サンは遊動民で、fission and fusion といって複数の核家族がついたり離れたりしながら移動生活を営むのですけれども、国内外のサン調査者も fission and fusion 的に関わりながら長期調査が続いてきたように思います。最初に紹介された五百部さんの図式からいうと、サンの調査は町工場式なのかと思いますけれども、もう少し上のイメージに近づけると、ボツワナとナミビアの調査も実は長期調査と新規開拓ではなく、研究者のネットワークによって進んでいるという点でつながっているのかもしれないと思います。

#### # 7 (図7)

その成果も最近かたちになってきています。左側は私が調査している子育てを comparative に、いろいろなサンの集団の事例からまとめて本にしたものです。右側はナミビアのフィールドで私自身が収集したライフヒストリーに基づいて少数民族であるサンの視点から地域史や国家史を見直したものです。



図6



図7

## # 8 (図8)

それから、新しいジェネレーション。今日2人とも参加してくれていますが、上は ASAFAS の大学院生の山本始乃さん、下は野口朋恵さんが写っています。僕からしたら世代が一つ下の学生さんたちもたくさん南部アフリカのフィールドに行っています。最初は一緒に行くことも多いのですが、その優秀な学生さんの新しい目を借りて、退屈することはないなと思っています。また学生さんたちは、僕からすると一つ下の世代の人たちにすぐに溶け込んで楽しそうにやっているのを見てうれしく思っているところです。山本さん、野口さん、ありがとうございます。

## # 9 (図9)

はじめに申し上げたように、私は田中二郎さんのおかげで調査を続けてこれましたが、その調査の歴史を次の世代にもつなげていきたいと思っています。以上です。

(中川) 高田さん、ありがとうございました。私自身が最初にも申し上げましたとおり、長期継続調査地と開拓はもちろん背反ではないわけですが、長期計画調査地にずっとこだわっていると、必然的に時間がなくてよその調査地を開拓できない。いろいろご事情があったようですが、別の調査地に高田さん自身が行かれて、そうするとやはりだいぶ視野が広がったということで、私もすごく共感できるところです。

同じ人が同じ調査地で続けることも大事ですが、違う調査地も見て、そうすると同じ人の同じ目線で、違う種類あるいは同属他種、あるいはということで比較という視点が入ってきて、すごくクリアになり、自分自身が納得できるという喜びというもの、やはりフィールド開拓、「開拓」という言葉は適当ではないかもしれませんが、複数の調査地を見ることは重要なところかなと思って、改めて聞かせていただきました。ありがとうございました。



図 8



図 9

## 質疑応答

(中川) 皆さんの発表、そしてコメンテーターからのご意見も頂きまして、ただ今、だいぶ予定より時間が押していますけれども、30分弱の時間がございまして、ここでまたご意見あるいはご質問、ご質問もさかのぼって、特に最初の若いお二人に対してはシニア質問を遮った形になっていますので、そこも含めてまずはご自由にご議論いただければと思いますが、いかがでしょうか。

チャットが一つ。これは竹ノ下さんにご質問だと思うのですが、いかがでしょうか。

(事務局) 「素人コメントです。調査の三つの段階はある意味、野球のチーム・球団の管理、運営、育成のアーキテクチャと類似していませんか」という質問が来ています。

(竹ノ下) ちょっと野球のことは分からないのでお答えしかねますが、引用したシステム開発の人の著書には、これはシステム開発のものではなくて人間が作るシステム全てに共通しているのだということが書かれていて、そういうことには僕自身も共感しています。

(事務局) 同じ方からもう一つ質問がチャットで来ています。「素人人間です。極限で生きる遊牧民の精神構造は、民族生態学的観点から現代人と比べて何か違いはありますか」という質問が来ています。

(河合) 私ですね。質問の意図がよく分からないのですが、精神構造ですか。これはお答えが非常に難しいですね。精神構造ということが何を意味しているのか、きちんと理解できていないと思いますし、それを現代人(牧畜民たちもわれわれと同じ現代人ですが)と比べてということですが……心理学者とかそういった方にお答えいただくのがいいのかもしれないのですが、すみません、ちょっとお答えしづらいです。もし曾我さんとかお分かりになれば。

(曾我) すみません、質問の意図がちょっと分からないのでお答えしづらいのですが、私たちが牧畜社

---



会に行くと、日本で暮らしているのとは全く違う考え方をする人々が暮らしていて、私たちも調査地で、こうした人々と一緒に暮らすことを大切に思っています。一方では、研究の対象ですが、他方では、人として大変学ぶところが多く、興味深いところでもあります。河合さんや他の牧畜研究者等と共に『遊牧の思想』<sup>1</sup>という本を書いておりますので、ぜひご覧ください。最後は宣伝でした。

(中川) 曾我さん、無理な振りにお答えいただきましてありがとうございます。

私の方から竹ノ下さんにお伺いしたいのですが、先ほども出ました三つのステップということです。先ほどのシステム論でいくと第三に当たると思うのですが、五百部さん流にいうと大企業という段階ですが、ムカラバはそこを経てもう一度中小企業的な、町工場的なものに戻ったということです。先ほどのシステム論でいくと第二から第三は必須だという流れですが、フィールドについていえばこの拡大期は必須なものでしょうか。

(竹ノ下) いろいろな意味でやはり避けられないものだし、必ずしも悪いもの、悪であるというわけではないと思います。つまり最初期に、ここは面白いことができそうだとなったときにいろいろな人が集まってくるのは当然ですし、そこで大きいプロジェクトをするのも当然で、いろいろな刺激が入ってくるわけです。ただ、運営していくのが非常に大変だし、これは今日話そうとっていなかったのですが、これからの時代、そういう巨大な調査プロジェクトをずっと続けていくのはサステナブルでないと思うのです。そうすると、大きなプロジェクトはある程度短期間で目的を達成して、そこで残ったこれからも続けていきたいテーマにしっかり集中して、縮小しながらサステナブルにやっていくのがいいのだろうと思っています。

(中川) ありがとうございます。これは私自身、それこそ町工場的にやりたいと思って始めたわけで、だからお伺いしたのですが、恐らく竹ノ下さんは重要視されている運営を日本人からガボン人スタッフに移行させたということは、やはり相当意識してやられたことだと理解しています。

---

<sup>1</sup> 太田至・曾我亨（編）『遊牧の思想：人類学がみる激動のアフリカ』昭和堂，2019.

#### IV コメント

確か湯本貴和さんの退官のシンポジウムの際にその議論があって、アジアのチームの方から、「ガボン人に移行したのはいいのだけれども、その後アジアではそれをするとイニシアチブを奪われてしまう。日本人はむしろ入れなくなるということも起こっているのだから、そういう危険もはらんでいるのではないか」という意見があったと思うのです。そこについての回答はそのときにされたかどうか記憶がないので、そこをどう考えるかということをお教えください。

(竹ノ下) そのときに答えたのは、少なくとも現状では、いわゆる欧米型のプロジェクトは、業績は共著論文などを増やして上げるのだけれども、統治国の研究者の研究能力を上げるという方向にあまり行かない。だから、私たちのやり方、つまりガボン人に学位を取らせたり、それも本当に本人にきちんと研究させて取らせるといふこととか、そういうところを私たちのプロジェクトで育ったガボン人たちはとてもポジティブに捉えてくれています。だから、これからも日本人とやっていきたい。つまり、われわれガボン人が主体となって、改めて日本人をパートナーとして選ぶのだ、と言ってくれています。ただ、これは美しい話であって、実情はいろいろ大変なことがあるのですが、そのときにやはり大事なことは、コンスタントに通うということです。つまり、ずっとコミットし続ける。お金が付いたからどーんとやって、お金がなくなったから行かなくなるというのではなく、何があろうとコンスタントに関わり続けるということをしていないと駄目だし、していればそんなにおかしなことにはならないと思います。

(中川) ありがとうございます。松田さんにお伺いしたいのは、こういう形でアフリカの類人猿の調査地は大企業型的なステップに多くの所が差しかかかっていて、ムカラバはそこを抜けたという話でしたけれども、松田さんも開拓をされて、もはやタイミングとしては拡大期ということで、先ほどのお話にもあったとおり、個人としてはすごく海外の調査研究者ともネットワークを組んで、そういう意味では拡大されていると思うのですけれども、調査地の規模そのものはそんなに拡大はされていないのですよね。そこは松田さんの志向性として捉えたらいいのか、あるいはたまたま人がいないから拡大していないだけなのか、精神、ポリシーとして何かあれば教えてもらいたいのですけれども。

---

(松田) もちろん、やりたい人がいたらやってくださいという気持ちではいましたけれども、あまり学生をとれる身分ではなかった。前職の大学で学生をとれなかったというのもあって、学生はそんなにいなかったわけです。その一方で、現地の大学では大学院生の co-supervisor になれるし、現地の教員などとはかなり密に共同研究をやっていて、私が個人レベルで可能な貢献として、向こうの学生が学位を取るための指導や研究論文の書き方の指導などをしてきているので、その意味で竹ノ下さんが言われたように、日本人というか僕だから一緒にやってくれるというところがあって、その辺が長く現地での研究が続いている秘訣かなという気はします。

日本は欧米と比べたら、地道で長期的視点でのフィールド研究分野への大型の研究費は少ないですよ。そうすると、霊長類が生息している東南アジア諸国の研究者を日本に招聘したり、研究面での資金的援助は難しいですよ。そうすると、アジアでのリーダー的立ち位置や、プレゼンスのようなものを上げていくためには、「この人だから」みたいな信頼関係を各国の人々と地道に築いていくことが大事だと感じます。今までいわゆる霊長類学だったら日本がリーダー的な役割を担っていましたが、そういった関係性が最近ではどんどん失われて希薄になっているように感じていて、日本の霊長類学の世界的なプレゼンスは今後どんどん減退してしまうのではないかと心配しています。

ですので、個人的にはあまり自身のフィールド研究を拡張していこうという野心はなくて、個人レベルで出来ることを必死にやってきた結果として今の研究ネットワークがあるだけかなという気はします。規模が小さければ畳むのも楽だし、畳んだ後にまたそれを広げるのも楽なので。竹ノ下さんが言われた、最初の第一段階と第三段階の間が第二ですけれども、第二までも行かないぐらいの本当に微妙なラインをずっと維持しているのが僕の調査地かなという気がします。

(中川) 分かりました。高田さん、高田さんのボツワナの方はどういうご認識でしょうか。大企業型になっているのか。先ほど確か町工場的で、fission and fusion のような形でやっているとお聞きしましたが、割と学生さんもいて、大型の資金もそれなりに取ってやっておられるので、結構大企業っぽいという感じもあって。でも、ご自分としては町工場的という感じでやっておられるのでしょうか。

(高田) そうですね。田中二郎さんが行ったときに比べて圧倒的にアクセスが良くなっているので、

---

#### IV コメント

fission and fusion といいながらもいろいろな国の人、ボツワナ国内も含めてフィールドワークに来るようにはなっているので、それによってももちろん現地からの発信も増えています。そういう意味で、いろいろな声が研究の文脈に乗るようになってきているという実感はあります。

ただ、最初に見た発展図式のようなものよりはむしろ、僕自身はその時代によって制度的、物質的、人的にいろいろな制約があるのは常のことで、その制約の中でみんなもがいているとか頑張っていると思うのですが、その頑張りを続ける中で、その制約をリソース、資源に換えていければ、きっとどんな状況でもいい研究ができるのではないかという印象を持っています。

(中川) ありがとうございました。こういう議論をしたくて実は五百部さんに個人的に「来て」と言ったのですが、来ていないので、彼のコメントも聞きたかったのですが。ありがとうございました。

## V 総合討論

(中川) 時間が10分ぐらいしかなくなったので、最後に、議論させていただきたいと申し上げていたことに進みたいと思います。霊長類学と生態人類学は、京大の方ではそういうチームを組んで……。西井さん、質問ですか。どうぞ。

(西井) 今日の趣旨説明にあるように、霊長類学と人類学の比較というか、調査開拓でどこがどう違うのかということについて、それぞれ若手の人から発表し、ベテランの河合さんと霊長類学の松田さんにも発表していただいたのですけれども、それを今日お聴きしているうちに、結局「開拓」という言葉から二つの観点が必要なことがあると思うのです。一つは、開拓ということはつまり調査地が必要、調査するフィールドがまずあるというのが前提です。それはどういうことかということ、調査する場所にプラスしてそこに調査する対象となるコミュニティが必要だということが一つです。それからもう一つ、開拓という限りは、それに続く人がいる、継続性があるかどうかというところが必要なのだらうと思います。

この二つの観点を比べてみたときに、今城さんが人類学から発表されて、河合さんや高田さんもおっしゃっていましたが、やはり人はしゃべることができるので、人類学の場合には、いろいろ訊くと「オータに訊け」「タナカに訊け」と言われたという感じで、結局相手が人の場合には、前に調査をしている人がいた場合に、かなり間が空いていれば別ですけれども、割と近い場合には継続性がなかなか取りにくいのかなと思います。それはある意味、調査者の側の問題ですよね。継続性というときには研究者が継続してそこに続けて入っていくということがあると思うのですけれども、そういう意味では霊長類学ではしゃべらない人たちが対象ということで、かなり研究者が主導できる側面が強いのではないかという印象です。だから結局、それを積み重ねていくことができるのかなという気がしたのです。

一方、人類学の方はかなり偶然性や受動性というのでしょうか、つまりそこに入ってどうするかといったときに、個人の感性であるとか、個人がどういう関係を築いているかということがすごく重要に

---

## V 総合討論

なってくる。そういう意味では、しゃべる相手が人間だとやりにくいのかなという気がしました。

だから、今日のお話から私は、かなり人類学は偶然性や受動性に依存していて、相手が霊長類の場合にはもう少し組織的に継続的にできるような対象との関係があるのかなということを感じました。ですので、霊長類学側の方はどのように考えられるのかということを知りたいと思いました。

(中川) 今からの議論の方向づけをしようと思って、西井さんはそれをご存じなので先に言ってしまったのですが、生態人類学と霊長類学で、新しい調査地獲得が開拓型なのか、開拓という言葉の定義はありますけれども、あるいは継続調査地、チームで継続調査していくのかということに違いがあるようなので、なぜそういう違いが生まれるのかということの議論をしたいと思っています。

西井さんは、霊長類はしゃべれないというところがあるので、「誰が何とかと言っていたよ」ということが起こりにくいので、それは一つ、チーム型、継続型になりがちなのではないかというご意見だったと思いますが、そのあたりはいかがでしょうか。はい、曾我さん。

(曾我) 今の西井さんの、サルはしゃべらないけど人はしゃべる、というのはすごく面白い指摘だと思いました。もう一つ付け加えると、人は至る所にいるけれどもサルは割と局所的にしかいないということもあると思います。特に大型類人猿の場合は観察できる場所が限られます。あと、竹ノ下さんのご発表にもありましたけれども、霊長類の場合、観察をきちんと継続してできるようになるまでにすごくエネルギーを投資しているから、確立した調査地に人が集まってくるのは必然かなと思いました。

逆に人の場合でも、グイ／ガナのような、いわゆるブッシュマンは限られた場所しか住んでいないから、狩猟採集民の調査をしたい人類学者は、そのフィールドに行かざるを得ないのだと思います。狩猟採集民の調査は、確立したフィールドに人類学者が集中した稀有な例と言っても良いのではないのでしょうか。牧畜民トゥルカナにも研究者が集まったという話もありましたが、あそこは最初にプロの人類学者が入ってフィールドとして確立し、そこに他のいろいろな学問分野の人が入っていくという形でした。また、トゥルカナの場合は、「強烈なねだり」という人類学者を惹きつける現象もありました。しかし、基本的にどこでも牧畜民は居ますから、一度はトゥルカナに入った人類学者も、その後は、ばらばらに別の調査地へと散っていったのだと思います。

---

河合さんの最初の広域調査の話などを聞くと、すごく戦略的にいろいろな所に調査者を入れていますよね。東アフリカの牧畜民には、ナイロート系の言語を話すグループと、クシ系の言語を話すグループの大きく二つのグループがあって、双方に人を配置していたのだと改めて思いました。人類学者をそういうふう配置することはあるにせよ、1カ所に集中させるのはなかなかないと思います。

だから、今日のこの「海外調査地開拓のすすめ」といったときに、生態人類学者あるいは文化人類学者にすすめるやり方と、霊長類学者に対してすすめるやり方があり、霊長類学者のなかにも、大型類人猿の調査を目指す人にすすめるやり方と、それ以外のサルを調査する人にすすめるやり方はおのずと違うのだろう、と思いながら聞いていました。

(中川) 内堀先生。

(内堀) 少し付け足しですけど、「文化」が付いている人類学者の一人としていつも思っているのですけれども、日本の文化人類学者というのは関西の人も東京の人も、どちらも結構年を取っても同じ所をずっと続けるのです。恐らく欧米の人はそうではない。欧米の人は、一番典型的、というか多いのは博士論文を書くときにある調査を長期的にして、それで博士論文を書いて本にして、後はちょびちょびとそこを続けた後は、拡大するということがあるけれども、あるいは全く地理的に別の所へぼんと飛んでしまう。生業的にも全く違う所をやってしまうという人が結構多いというか、そちらの方がマジョリティで、人類学者はそういうものであると思っているわけです。日本人のように、私もそうですけれども、同じ所を50年やっているというのは多分ばかだと思われるだけですよ。よほど想像力のない人類学者なのだろうと。あるいは金の取りようのない人類学者なのだろうと。恐らくそこは、文化人類学というものをどういう学問としてイメージしているかが全然違うのです。

今日は京都系の人の話ばかりでしたね。たまたまではないだろうけれども、その話を聴いていると、多少違和感はあるのですけれども大体事情は分かるわけです。もちろんよく皆さんのお話を聞いているし、個人として継続性がありますから。東京というか東日本でも、個人としての日本人は割とそうです。ですが、恐らく東日本では組織としてのそういう継続性はないのです。組織というと大きさかもしれませんが、スクールとしての継続性はない。それに対して京都系の人はスクールとしての継続性も持って

## V 総合討論

いる——そういう意味ではスーパー個人なわけですが、スーパー日本人なのです。その辺が随分違ってることなのだろうと思います。

これは僕がはっきり知らないので霊長類の人に聞きたいのですけれども、霊長類学者は西洋でも個人として割と同じ所をやるのではないですか。日本人はどうか分かりませんが。ですから、継続性という場合、研究者個人としての継続性と、スクールとしての継続性と、場合によっては本当に組織としての継続性に分けて考える必要もあるし、人間と人間以外の霊長類という分け方もできるけれども、やはり日本の中では大学の違い、世界の中では日本と日本以外というか、一般的には欧米との違いを考えるべきだと思います。

そして他にもいろいろな要素があります。多分、調査地の開拓や調査地の選択に関しては、先ほど曾我さんが言われたことは割と正しいので、人間はここに行けないと思ったら別の所をやればいわけですが、多くの霊長類はそういう選択が利かないですね。そういう外的な選択を決定する要因をいちいち列挙していった方が、こういうシンポジウムでは何か一つの軸が立つのではないかと思います。ヒトはこうだ、サルはこうだうんぬんとやっていってもらちが開かないところがある。そんな印象を持ちました。

(中川) 私は企画者としてらちが開かないとは思っていませんけれども、ただ文化人類学者の中でも、それこそスタイルや文化があるということですね。ただ、少し内堀さんに教えていただきたいのは、欧米流にいろいろ渡り歩く人類学者もいて、内堀さんや自分のように1カ所でずっとやっていくというスタイルもある。しかし、文化人類学者は決してつまない。つまないといいますか、スクールとして、あるいはチームとして、ある調査地でやっていくというスタイルは基本的にはない。個人でやる。そこはもうそういうスタイルしかないという理解でよろしいですか。

(内堀) 私もあまりいろいろなことを言いたくないというか、私の調査などは本当に、先ほど言ったようにばかの骨頂で、少しよその所にも行きましたけれども、ずっと同じことばかりやっていて。それで許される学的風土というのも日本にはあるのですね。多分、中国史、東洋史などをやっている人はそれこそ学問だと思うでしょうし。それに、ある意味で社会科学というよりもむしろ人文学と言いたいの

---



すけれども、日本の人文学というのはやはり職人的に一つの道をコツコツと貫く者が褒められるようなところはあるのです。

(中川) ご質問の意図は、チームでやるというスタイルは決してないのですかという。やはり個人の……。

(内堀) いや、私はどちらがいいとも思っていないで、単に事実としてそうなっているというだけです。これは不思議で、私もどうしてそうなったのか分からないのですけれども、例えば東大の文化人類学で唯一継続性のあることになっていたのはアンデスの調査です。けれども、アンデス考古学の調査は東大の文化人類学研究室としては途切れたわけです。これは恐らく意図的に切ったのです。それはそれなりに理由があって、同じことをいつまでもやっているべきではない、ある組織として、研究室の存続の意義としては同じことをやるべきではないと思ったのでしょうね。それはそれで、絶対正しいとはいえないけれども、一つの判断だと私は思います。けれども、京都でアンデスをやっていたら、多分今でも続いているでしょうね。これはだから学問の内在的な問題ではなくて、人間関係や大学としてどういうものを残していくかというコンセンサスの在り方とか、そういうものだと思うのです。

恐らく一般的に文化人類学の調査というものはチームでやるものではないですよ。それは、数として絶対少数者の位置に自分を置く必要があるからです。その社会における入門者として。お金や政治的権力関係で人類学者の方が上に立つと、欧米人なら言うだろうけれども、そういう欧米人も多くの場合はできる限り、個人としては一番弱い1人になって調査地に行くわけです。もちろんそうではない例もあります。アメリカの大学では地域研究として大きな継続プロジェクト・プログラムを持っていることが多い。それは日本とむしろ違うところですが。

だから多分、研究の在り方としてどの部分が強調されてきたかということが違うのだと思います。どちらにでもなり得るけれども。恐らく東大の文化人類学が1950年代の初めにできたときは、個人でやることをむしろ強調したのでしょうね。それがずっと続いてしまったと思います。唯一違うのが考古学系のアンデスだけだったわけです。考古学というのは大学や研究室に限らず、どこでも全く団体とチームでやるよりしょうがないので、少なくとも近代考古学はそういうものですから、その違いがあって、

---

## V 総合討論

そうした学的風土の違いがいろいろ、その風土がなくてもいいところに移植されるということはあるのだと思いますが。恐らく人文学でも、ある場面ではチームでやるようにはなっているわけですから。

(中川) ありがとうございます。竹ノ下さん、どうぞ。

(竹ノ下) 今、内堀さんの話を伺っていて思ったのですけれども、その前に西井さんの話にコメントを返させてもらおうと思います。西井さんのコメントを伺って、認識は同じなのですが、感じ方がだいぶ違うなと思いました。つまり、河合さんなどが「オータに聞け」と言われるのが非常にやりにくいということをおっしゃっていましたが、要するに昔のことを聞けるわけですよね。ヒトはしゃべってくれるから。それから、誰か分からなくても「俺は〇〇だ」と名乗ってくれるわけです。だから、実は研究者と研究者の調査期間がだいぶ空いていても、そこを埋めることができる。それを埋めようとしたときに「先人に聞け」と言われて、やりにくいという話なわけです。

では、しゃべらない霊長類の方がやりやすいかといわれると、何一つしゃべってくれないわけです。自分が1年間調査をしていて得られるのは、その1年間の時のことしかないから、2年前、3年前の情報をゲットしようと思ったら、ずっと誰かがやっていて、そのリアルタイムの情報を持って受け継いでいかないと長期調査は成り立たないというところがあります。だから、「オータに聞け」と言われても、「いや、私が知りたいんだ」と言って教えてもらえよなどと思ったりするわけです。だからやはり、しゃべる・しゃべらないというのは違うと思います。それで、ヒト屋さんの調査は、真実性はともかくとして、時間軸をさかのぼった、つまり3年間調査をして、ある意味無時間的なエスノグラフィみたいなものが書けるところが少し違うのかなということを僕なりに感じました。

内堀さんのお話をお聞きして思ったのは、海外の研究フィールドだと1人でやるという感じかもしれないのですが、国内のフィールドで、学生のフィールドワーク演習などを兼ねてずっと通い続けている1人の研究者が、学生を代えながら研究室としてずっとやっているとか、そういうフィールドは多分ありますよね。そういうやり方は海外ではなぜできないのか、やらないのだろうか、あるいはやっているところがあるのかというのを知りたいです。

---

(内堀) 海外ではないというのは、なにがですか。

(竹ノ下) 日本人研究者が海外のフィールドに、ここと定めてずっと自分の研究室の学生を継続して送り込んでいくみたいなことはないのだろうか。

(内堀) ないわけではないですよ。ないわけではなくて、あるのですけれども、やはりその比率が全然違うということです。

(中川) 高田さん、どうぞ。

(高田) 内堀先生との今のやりとりなのですけれども、きっと他の誰か人文系の人が言うかなと思って今まで言わなかったのですが、最初に今城さんも言われていましたように、やはり文化系の人類学をやっていると開拓という単語が若干おこがましく感じてしまいます。実際には向こうの社会がずっと続いてきたところに、大して何もできないやつがぼんと少数来るわけで、その人に対して親切にいろいろ教えてくれるという図式ですよ。

そこでは、河合さんが言われていたように、すごく特異なやりとりが行われています。そして、人類学者はそこに魅力を感じています。わからないことだらけでも、いつかきっと分かると思いながら頑張るわけなのですけれども、それを可能にしているのは、みんなが分かるように周りから働きかけてくれるという図式があつてのことだと思うのです。グループでの研究が成り立ちにくい一因は、分かったつもりになっている研究者が複数いると、分かったつもり同士でぶつかってしまうことだと思います。先ほどのように学生さんを連れていく場合は何か役割分担があつて、分かったつもりになっている先生に、分かったつもりになろうとしているつもりにしてくれている学生がいるという図式で何とかうまくいくのだと思うのですけれども、そういうある種のお互いに相互理解をしようという姿勢がやはり文化人類学では鍵になるのだらうと思います。

(栗田) 東京外国語大学の栗田です。文化人類学系のフィールドワークと霊長類学系のフィールドワー

---

## V 総合討論

クの違いがかなりはっきりしてきたと思うのですが、もう一つ、付け加えたい点があります。あまり表立って言う人はいないと思いますが、先ほど内堀さんが言われた傾向をさらに発展させると、内堀さんが生きている間は内堀さんのフィールドには誰も行きません。研究成果が内堀さんに批判されるのが怖いから。西井さんの所にも行きません。そういった先輩の所に無理やり入って行って、得にはならないのですね。

ですが、新しい所に行けば、先ほども出ましたけれども、まだやっている人がいないから、自分が権威になれるのです。ですから、新たなフィールドが次々に開拓され、どんどん分散してだけで、同じ所は繰り返されない。しばらくして、フィールドの権威の方が亡くなると、今度はその方を批判してやろうと、そこにまた入るといことはあります。

ですから、これは学問の性格という問題だけではなくて、文化人類学系では、どのフィールドをやれば自分にとって得かということ考えた結果、常に新しい開拓を続け、人が入った所は避けるという慣習が出来上がったのではないかと思います。

(中川) ありがとうございました。まだまだ議論は尽きないのですけれども、情報交換会のために時間制限があるようなので、この続きは情報交換会の方でやりたいと思います。それでは、長時間にわたりますして発表、そしてご議論いただきましてありがとうございました。今日はこれでお開きにしたいと思います。ありがとうございました。

科学研究費補助金基盤研究 (S)  
「社会性の起原と進化：人類学と霊長類学の協働に基づく人類進化理論の新開拓」  
2023 年度 公開シンポジウム  
海外調査地開拓のすすめ  
共催 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所  
基幹研究 (人類学)「社会性の人類学的探究：トランスカルチャー状況と寛容／  
不寛容の機序」

---

編 集：河合香吏・中川尚史  
編 集 補 佐：谷口晴香・川添達朗  
発 行：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所  
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1  
印刷・製本：株式会社ワードオン  
〒335-0004 埼玉県蕨市中央 7-56-3  
表紙デザイン：株式会社ワードオン  
表 紙 写 真：(表) 今城尚彦、竹ノ下祐二、松田一希、中川尚史  
(裏) 河合香吏、田村大也、高田明  
発行年月日：2024 年 9 月 2 日  
ISBN：978-4-86337-540-6  
©2024 Individual Contributors



この作品はクリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンスの  
元に提供されています。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

